

右、申叙す文の寫眞。申叙文とは、天易眞あまやすしん著「人間存在の實存的分析による存在論考」『空』直筆原書を天平あまひらふし普肅が纂輯し木版に改、上製せし本 帙「金本」とふ 扉に録する文。「茶掛『私藏白圭野燒小孔貫入説叙文』」 帙「説叙文」とふ 原寸大複製図画を天平本に折り添へし事申叙す。説叙文とは、天易眞が曾祖父 天易眞あまやすしん髓之丞左右衛門が藏せる「白圭野燒」茶碗を平叙解説し、懷紙に綴りし文。装幀のうへ、茶掛にさる。 なを右申叙文是堂書体にて今様人に廣く読み解かると言ひ難きゆ多教科書体へ替へ、次左之行へ文之寫うつしを掲す。かやう再掲し、究學徒の學究魂を涵す。

申叙文再掲「添附 天易眞髓之丞左右衛門書 私藏 白圭野燒小孔貫入説叙文 原寸大複製図画」
其文解「天易眞髓之丞左右衛門書『私藏白圭野燒小孔貫入説叙文』原寸大複製図画を添附す」

又、申叙文には補足説明小文 帙「小文」とふ が傍記され、小文の旨 一、扉の次頁に説叙文の文を明朝体にて掲載せし旨(次頁参照) 二、其處に『天易家の未裔たる天易眞が曾祖父の筆を抑掇す』 帙「抑掇」とふ を併せ録す旨 及び抑掇原文 天易眞が垂露及び龍爪の伎わざくす楷書なれど癖有 活字楷書へと替へ録す。三、抑掇に纂輯者 天平普肅あまひろふしなり の補遺注釋を附す旨 以上。 なを小文も又堂書にて今様人に難く、教科書体へ替へ、次左行再掲し、學究魂に資す。

小文再掲「於下一頁載し説叙文之同文 但修改し向明朝體的活字體於全文縮小了 又一起載惟『天易家未裔天易眞 兮抑掇曾祖父之筆』原書是毛筆の手寫修改し向楷書體的活字體於全文縮小了 又做編撰纂輯者の補遺注釋附」
其文解「この説叙文の同文を次頁に掲載す。但し 明朝体印刷活字に替へ縮小す。又惟れへ『天易家の未裔たる天易眞が曾祖父の筆を抑掇す』を併録す。原書是毛筆手書にあれども 楷書体の活字へ替へ縮小印刷す。及び編撰纂輯者の補遺注釋を附す」

平成廿四年壬辰 甲辰清明 虹始見 万物発而清淨明潔 可知草名之候
神樂かみい品あ晒れ厨す御をが南なる眞神眞邦統維祇之王樂之家の末朝臣

史文篇纂筆畫臆且止式位天平家二九八代肅肅が長子雨肅が子 普肅 再拝頓首

茶陶ちやたうこれ

しのと云いひ
しにこそあれ

小孔せうこう

貫入くわんにゅう 火色ひいろ

あらはれ

長石釉ちやうせきいうと云ふ

釉薬ちゆうやくの

白しろくみにし

しの釉くすり

卯うに
なすみしか
の鉄絵てつえ付つけ

美濃みのの碗

和歌わかの若わかくに懷紙かみきれに綴とこまられ、床間どこまの茶掛ちかけにされたるは、曾祖父手そそふでずから、名物いふみにあらず。
紙裂かみきれなるも同然どうぜんなるもの、祖廟そべうか人の遺文いぶんと雖いへども、世辞よそごにも善よしとは言へぬしろもの。
数寄屋造すきやうぞうの普請ふしんに尽くし、古筆墨蹟こひつぼくせき、遙はるか及およばず、紙織しせんを薄めしはる〇茶ちやに浸ひし、年経としやうりしか
の余情よじやうを醸かす。詩文しぶんか水臺すみゑにあらばかくても、文ふみそれ、茶腕ちせつの解説けせつ。彼の天臺てんたいをば偲おもは
せる哉。

※ 編纂者補遺註 天易家は眞神郡龍吞村の旧家。

和綴の冊子があつた。

絹の繊維が混ざった白い手漉きの和紙に繊な雲龍紋が金線で刷られ、その上に篆書や隸書楷書や草書が綴られ、稀に甲骨文字も鏤められていた。傍ら摺かれたままの毛筆には黒地に漆が塗られ、その上に金の雲龍細工が施され、雲の部分には一部朱色が附されている。九龍紋が彫られた青みのある黒い石には墨汁が乾涸びていた。

一對の龍が玉を奪い合うよう戯れる姿が金泥を以て描かれた墨が隣に置かれている。

「小説さ」

彼が言う。

私は手に取ったまま頁をめくり続けた。

「丁寧に綴じてある。吟味されたであろう用紙は端正に揃えられ、眩いくらいに鮮やかだ。文字の細さも精緻だし、とても繊細な筆運びが爲されている。書体の扱ひ方にも意味があるに相違ない。

君は哲學の愛好家だから、内容もそう云う類のものなんだろうな。それにしても小難しいタイトルにしたものだ。尤も私などはこの装丁を眼にただけで手で触り、閲覧してみたくなるが、書籍の愛好家には装丁や冊子の厚みや活字やマテリアルなどにこだわる人も多い。それが事實であることは間違いない。

しかし公募に応ずる爲には、この体裁では」

私の言葉に眼を細め、顎を持ち上げて微笑を泛べる。

「そう云うコンセプトチュアル・アート Conceptual Art だから。」

ただ龍安寺石庭のよう枯山水であることを希うばかりだよ。昨今文學に於いては左様な藝術にステイタスはない。然し商業性や顧みられることが少なくとも無価値な譯ではない。いく許かの人々には欣びを齎し得る。

読ませるよりも骨董のよう手で玩ぶ爲に作ったと思つてくれ。点綴する文字を眺めたかっただけさ。右端を貫孔され、糸を通して縛られた、ただの紙の束でしかない。装飾する文様は平仮名や漢字。物品として黙す表情は媚びるでなく無難、在るものである何かと云う以上ではない。だから訴える。存在はなぜ人を惹くのであろうか、と。

男女の情の機微もなぐり都会の孤独もない。それが僕には心地よい。抒情性もなく、洞察もドラマもない。

非常に well-done だ」

それがこれから見て戴く代物、左に擱く書冊之和綴本——人間存在の實存的分析による存在論考——「空」である。残念ながら原本を汎用に再現することは到底稚拙なる我が才能の及ばぬ處であり、一覽に入れられるのは通常フォントによるものでしかない。諸賢が空想を膨らませて笑味されることを幸甚と感ずる次第である。

なお本来は卷末附録にすべきものであるが、私個人の判断で卷頭に略歴を附す。

彼の戯れ紙る執拗な理論が純粹なる論理性によつて導かれたものではなく、先天的な、またそつでなくば少なくとも生理的な、諸要請から増殖繁茂したものであることが理解されよう。

最後に、我が眞神の郡、かつては久邇こゐにありし我ら一族に、永久の彌榮いやさかあらんこと清爽の魂魄を以て祈念し、此處に我が筆を擱く。

平成廿四年壬辰 壬寅雨水 土脉潤起 雪冰溶化成爲雨水之候

カムいあれずを
神樂話晒厨御が裔眞神眞邦統羅祇之王樂之家 朝臣

史文篇纂書藏官止式位天平家三九八代肅肅が長子雨肅が子 尊肅

※

冊子前後に書画彫工等の記載があるが、武家官位（名譽職的な官職・位階）のようなもので、眞神地方特有の配慮からくる戲言。實際の製作には一切携わつてはいない。また、冒頭記載に著作権等が明記されているが、電子書籍化した際に併せて application 化を行ったときに附加したもので、当初のオリジナル版にはなかった。土脉潤起とは「つちのしょう、うるおいおこる。すなわち「雨が降って土が湿り気を含む」の意。二月廿日頃。

年代記 The Chronicle of Macotoyah Amayass

四歳の時代

炸裂的に巨大なものへの崇拜時代。宇宙の大きさは無限である（周知のとおりそれは誤った説であるが）と聞いて驚嘆する。なぜなら無限の大きさを想像できないからだ。無限の空間を思う泛べようとすれば、どうしても銀色の背景ができてしまう。

また生理的に立方体を崇拜していたが、具体的な対象は石礫であった。そしていつしか無限の宇宙よりも巨大な石礫を妄想することが最大の快樂となる。無論、無限よりも巨大なものを妄想することは論理的に不可能である。しかしそれができてしまうことがあった。そう云う瞬間には必ず大きなエクスタシスが訪れた。それが目的でそんな妄想をしていた。彼が哲學に妄執する最大の人間的動機である。

六歳の時代

崇拜はより純化された快樂を求め、巨大さと云うかたちを捨象し、炸裂自体に収斂する。すなわち無限よりも巨大な石礫を想って得られる快樂の本質が「無限よりも大きい」と云う、論理を超越した炸裂性にあることに気が附いたからである。

よって最も強烈な炸裂を求め、様々な妄想を廻らす。またそのころ、ビッグバンを知り、大きな感銘を受ける。「空前絶後」と銘打った大爆発を妄想し、エクスタシスを味わう。

十一歳の時代

『空』という考概を知り、衝撃を受ける。なぜなら『空』よりも強大で激烈な炸裂があり得ないからである。最大の動は極まって最大の静になる、と云う炸裂的快樂が彼をそのような思想に導いていた。『陰極まって陽となる』説を知ったのはもつと後のことである。

十二歳の時代

『空』とは『それそのままであること』と云う結論に至る。何も變じないことが最大の炸裂であると考える。特性をまったく特定しないことであり、文字どおり『空』であるとなつて予想外に平凡な結論に至り、後々苦汁を味わつた。

十六歳の時代

時間の静止を経験する。しかしこの最大のエクスタシス体験を最後に一度とそれを体験することはなくなった。



-人間存在の實存的分析による存在論考- 「 空 」

あま やす まこと や
天 易 眞 兮 編述稿本

書画彫工目次

出 像 画 どうげん ぱらみと
同 源 叭 羅 蜜 斗
浄 書 筆 工 あまひら ふせう
天 平 普 蕭
削 刷 人 いの いれつ
彝 之 裂

発 販 書 行

あまの かぶき ひらゑ たかふし
天 之 哥 舞 妓 平 衛 隆 臥
い き さはらび しらふね たいらく
彝 左 早 蕨 白 舟 大 楽
ほの しゅんけい
炎 春 慶

Copyright©

Makotoyah Amayass 2012 All Rights Reserved.

Published by
Mgami Toujin Associates

一、 序 叙 『存在の意味究明の實踐に基づく實存的解説及び予備的基礎分析』

一、 本 文 『實存的分析による解釈學としての普遍的現象學的存在論』

一、 卷末附記資料 龍峯寺僧 龍鳳 公案錄 寂無記』 肇輯第十七段 抜粹



— 序叙『存在の意味究明の實踐に基づく實存的解説及び予備的基礎分析』 —

「眞今、これを見る。信樂だ」

梱包を解くと緋色と灰色との茶陶が現われた。

爛れたような面には、火ぶくれ、ふりもの、ひつつき、火割れ、石はぜ、灰被り、こげ、と火の做す信樂陶の特徴で、零れんばかりあふれ返っている。窯炎が粗くうねり固まつたかのように見えた。信樂に人爲はない。すべて窯変の自然が做す技である。

手に取ってみた。

釉薬のない、緋を帯びた明るい灰色を閲する。古来良質で知られた信樂の土に相違ない。腰や胴を指の腹で撫でる。珪石や石英の粒が入り混じって木ぐさを噛み、松薪の滾り降らせた灰を被つて膚は畸形の妙に富む。延享六年（一六七八年）の文獻に穴窯を以てされたとの記録があるも、火点の逝く景色である。江戸時代、高名な産地でかように原始的な窯を使用するなどまずなかつたのではないか。無論、本品はもっと最近のものではあるが。眺めるほどに此れの緋は切なく感じられた。

いつしか祖父の存在も薄れ、思いに耽る。遠き夢想に引き込まれた。小生は初めて幼稚園に行つたときのことを憶えている。外に独りで出られず、家に籠つていた子であつた爲、園友らは会つたことのない者らばかりであつた。孤立し、頭わに晒された状態の小生には、彼らのぶざけたりはしゃいだりする普通の態度が見かけとはまつた無關係に、異物として迫つた。乱暴されたように感じ、心傷附けられた。疎外感を味わい、怖くて、泣き喚いたものである。

小生には人間のエゴが怖かつた。剥き出しの敵意となつて映えていたのだ。わずかであっても喚ぎ出し、踏み躪られるような気がしていた。自身にエゴがなかつたと言つつもりはない。他人のそれが赦せなかつたのである。人の眼を見ることを畏怖していた。そこに欺瞞と自己肯定しか観せられなかつた。他人に悪感情を抱いていることへの後ろめたさの爲でもあつた。

幼稚園時代の二年間、終に口を利くことはなかつた。通い続けられたのは保守的な、規則への遵守を性分とする性癖の爲であり、父母にわるいからと云う自責の感情、つまりは自己憐憫的な諸観であり、矢面に立つことを拒む小心、悲觀主義的な甘えのせいである。

高校を卒業してからは、しばらくの間、本屋廻りを目的として、龍谷村の駅から二つ目を降りた難久^{なげくさ}菫の町をうろついていた。そのころの小生はと言えば目意識の強い年頃であったから、自分は既に一端だと強いて思い込もうと虚勢^{きせき}していた。書籍の代金を払う際に緊張して店員の顔が見られなかった癖に、である。

その日も古本屋で買った『無間閥』をすぐに読みたい、喫茶店に入ったはよいが、強張る顔が恥ずかしく、気取った表情を做すも、坐つて組んだ脚が痙攣し、卓脚を蹴るに及んで発注する喉がしわがれてしまい、給仕された珈琲茶碗の耳に廻す指が震えて波させる始末。動揺し切っていたにはもう二つの理由があった。

小生が着席した後に向かいのテーブルに坐つたのが女性だったせいだ。それで症状に拍車がかかってしまった。腕を動かすにも棒を振り回すような感^{かん}じであつたし、鼻息が急になつて、頬を緩めようにもぎこちなく、平衡感覚が失われたかのように手をどこに運ひ、足をいずれに置けばよいのかわからなくなる。だがじきに過剰な意識は霧のように失せた。それもまたすらりと背の高いその女性のせいである。

顎が滑らかに太り、鼻筋高く鼻腔が縦長、瞼の重が蓋微の花びらを做すように睿らかに眼の上部を縁取り、独特のまろろみを持った薄い茶色の眸、顔の全体が華やかな造りで、晰らかな輪郭を浮き彫りにし、膚の風合のせい^{せい}いか、水墨のたらし込みの技法を施したかのようなまろろみがあり、それが見る者を蕩かすような素肌^{すみ}肌を芳馨させていた。

睜^{みひら}かれているような眼差し、大きな双眸がゆつくりと動く。それが繊細な優さを帯び、見る者の胸中を疼かしめる。

だが彼女を象徴するのはラテン系やインド系の人らの眼周によく見られる暈のような眼窩の色合^{いろあ}いであつた。瞭かに化粧でなく、生クリームに溶けたチョコレート垂らしたような色の変化を孕ませ、柔らかなみの繊細さに喩も及び附かない。

小生は軽い陶醉を覚えた。

俯いて卓の寄木の意匠に目を投じては、上目遣いに盗み見をするの繰り返し。傾けた碗に唇をあててから既に空いていたことに気が付き、飲むふりをして戻す。距離を誤り、受け皿に音をさせる。顔が熱くなつたが構つてもおられず、時折瞼を固く閉じては、その裏に焼き附けよう^{よう}と心がける。

彼女はメニューを見続けていた。初めてここに入ったようであつた。少なくとも以前には見かけていない。小生も毎日いるわけではなかったが、彼女の仕草にそれが漂っていた。注文を終え、彼女はギヤラメル色のバッグから小冊子を取り出す。小さいが、溝つき角背

の上製本で、カバーはなくとも角革があり、金の型押しが純白の表紙にパレス・スク립ト体で題名を細く走らせている。小生はいよいよ酔い痴れた。その織い文^{かよ}字に身の奥をくすぐられるように感じた。

彼女が行を追う度に上下する睫毛は貴石や金銀細工で造られた機械仕掛けの胡蝶が羽を上下させるがごとくで、またその度に眸の虹彩が雲の流れに深く翳されたり明るく燦めかせられたりする湖のようにさま変わりする。

給仕の一人が髪靡かせる十九歳くらいの男で、白シャツの痩身に長い黒前掛けをはためかせていた。

小生には、彼の目線がどうにも彼女の上に留まるようで、気にかかつて仕方がなかった。

淡い嫉妬心が芽生え、薄紫色のぼかしを倣して滲む。やがて招来されたかのように濛々たる暗澹が破滅の予兆を孕んで膨らみ、胸中から末端へと緩やかに伝播した。併せて思惑が図にあたったような痺れと興奮とを覚える。彼女を奪われてしまつのではないかと云う畏れや競争者への敵意、憎悪、自分が成せないことをいとも容易く成そうと欲望する同輩者への嫉妬に苦しみながらも、生来の執拗な気性が立ち現われ、暴かなくともよい傷を裂き開くかの悦びに身を震わせて小躍りした。

どう云うことかと言えは、小生の気分が或る種の残酷性を帯びるのである。人がすまし顔の裏に隠す生々しい欲や偽りや自己中心性を微細までも嗅ぎ分けて穿り出し、自ら心傷付きながらも鞭を欲す者のように解剖に熟中し、自身は犠牲者であり、虐げられた者なのだ。と心中で髪振り乱し、詰り訴えるのであった。嘘を吐かれ裏切られたいと待ち望むように、少しでもそのような妄想の要素を窺わせる兆候を捉えろと、事実を曲げてまでもそう解釈するのである。

自虐的に自己を不憫に貶め、感傷すると言ふ要素もなくはないが、どちらかと言えは舐めずりしながら待ち伏せし、機会を捉えては、ねぶるように相手の不義を挙げ連ねて突きつめ愚弄する逆上の被害妄想であった。『それ、それ、やっぱりおまえはそんな奴じゃないか。おまえは嘘を吐いた。強欲、その醜さを知れ。おまえは騙したんだ。裏切り者めが』と罵る溜飲である。誰に対するとも言いがたい、方向性のない復讐、残忍、自己の尊厳を破綻させて厭わず、なりふり構わず喚き叫ぶことであつた。

まるで至誠を辱められた者にでもなつたかのようにである。小粋な年少の男と優位性の強い女とが小生ら暗鬱人にはわかりかねるやり方で要領よく惹かれ合うような（この段階ではまったくの妄想であつたが）情景に接すると、禁欲の誓いを立てし聖職者が心奥に宿

すねじくれた歪みのような憤りが迸り出るのだ。

このような意地悪さや妬みを発する自己の根底に強い敵愾心の存在を感じた。敵愾心とは懼れから生じるものである。懼れとは自己の安立性が脅かされ、自らの存在が否定されることへの懼れであり、これに対する逆上の抵抗反発が敵愾心だ。微弱か過剰かの程度差はあれ、どのような人にもこれが備わる。他者と云うものすべてが自己に対する抑圧者だからである。緊張を強いるものであり、ままたぬものである。どうして敵愾心や懼れを抱かずにいられようか。自制を保っていられようか。生き死にの問題にも繋がるすべし。憎悪を孕ませて当然とも言える。

事實、小生は手を逆立てる猫科の獣のように憎しみを滾らせていた。その若造にはもちろん、彼女の存在自体にもである。それは理不尽で狂暴で、どんな矯激も犯しかねない痴情であった。

現實世界を生きる以上、誰もが心底に潜めているものだ。思つに任せぬ他者はかりで構築された憂世でどうしてこの憂を溜めずにいられようか。

そうではないか。一切の存在者は他者であり、他者とは自己から乖離した、異質な者疎外する者の像であり、抵抗性のことであつて、背く者であり、阻む者であり、原則的に我が方を否定する顕在、違和感、調停の必要性を感じさせる者、気遣いを生じさせる者から。

所謂『意識する』とはこのことであり、緊張の表明に他ならない。

それが自分にとって何であるか、が気に懸かるのである。自己の欲望を満たしてくれるものか、自己に対する脅威であるかに関心があるのである。自在無碍なる状態を求める存在である霊長類にとっては、これだけでも既に充分な抑圧である。まして欲望を満たしてくれなかったり、脅威であつたりすれば、敵愾心若しくは懼れを抱くのが生命体の普通であらう。

すなわち小生はそのとき、自己の態度をきよく分析していた。

かように解剖學的な分析を嗜好するのは、幼少の頃からの性癖で、自身これをして『眞實への渴望』と呼び、美讀していた。眞理への欲求など案外こんな程度ではないか。だから思う。人が言う眞理の質を試すには、その論理的正確より、動機を極めるべきだ、と。理叡的な意爲行爲をも生物學的な見地から解析すべきなのである。

などと思案に耽りつつ、待ち続け、終に小生の希いどおりのことが起こった。給仕が来て彼女の注文した珈琲を卓上に優しく下ろす一瞬に、彼らは互いに眼を合わせた。男は去

る。象徴的にも見えたが、何も起こらなかった。小生には充分であった。心が爛れ烙かれる嫉妬とともに、彼らに対し「見たぞ、ざまあみろ」が噴き上がり、雀躍目裂する。

それはバロック様式の宮殿に整列した正装の喇叭隊が高らかに王者の到来を告げる鼻音のファンファーレであった。

やがて彼女は本を閉じ、BVLGARI(ブルガリ)リスト・ウォッチを一瞥するとジャケットを翻すかの仕草で席を立った。

人々が思い思いに語らうカフェで小生は独りとなった。周囲は平坦な画面に過ぎない。音画はエコーがかかった再生音であった。違う場所で録音したものを拡声器で鳴らしているように聞こえる。

いったい、彼ら群集は何を語り合うのか。人は皆、自己肯定の爲に人の行爲を否み憎しみ、論説や作品に賛意を示したり稱讃したり、失恋した友に同情したり、不幸な人を憫れんだり、正義を唱えて批判したり、虐殺される人々に無関心だったりしているのである。そこに何を期待できるのか。

我々は自己と云う体験の、球体の中に隔絶されている。

いったい、人は人に何を期待するのか。

だがそれなしで生きて行くことなど、考えられない。愚かな、まことに愚かな無爲だとは思えなくともである。

翌日もまた、電車に乗り、薙久養駅を降りていた。

喫茶『サン・ミッシェル』のガラス扉を開ける。坐る。メニューを眺める。午後 時彼女が来る。小生は和綴本を出して読むふりをする。給仕が素早く近付き、彼女に微笑む。仔細洩らす観察する。

非現実的だった。薄膜のうちに封じ込められていて、何も彼もが間接的、二次的でほんのつことは何一つ起こっていない。焦つてもあがいても虚しくもかくに過ぎない。被膜の生暖かい毛細血管が脈拍する感触を覚えるだけであった。

やがて彼女が去る。小生は残る。日射が茜に傾くまで待つかのように動かなかった。埃が燦めくのを酒中に舞う金粉のようだな、と見据え続けていた。物が鮮やかに濃く映える時刻。日常の持つ眩暈のような静けさがあった。

翌々日には男が挨拶し、女は微笑んで応える。俗っぽい、小生には耐えがたい、無意味で非情な、粗雑で乾いた外界の空気がそこにあった。それでいながら見続けずにはいられない美しく悼ましい光景。ストーリーのわからない古い映画を眺めているようでもある。

小生は熟慮の末、結論した。

無爲だ。諦めるべきだ。だつてどうにも自分が言つてを利かないではないか。求めれば求めるほど、斥力が働く。意識すれば意識するほどに乖離する。やれる奴にはやれるが、やれない者にはやれないのだ。

どうすればよいのか、毫たりともわからなかった。彼女は小生以外の人間である。どうにもならなかった。他の普通の人は、いったい、どうしているのか。どうやってこれを凌いでいるのか。

彼女が自己以外の人間、他者であることそれ自体は、無機質な、純粹な客觀的事實として捉える（そんなことができれば、の話だが）とするならば別段問題ではない。

だが求めるとなると事情が異なる。執著とは隔たりをなくしたいと欣求し、とり憑かれ焦燥し、疾駆することなのだ。意識の隔てを反故にして、求めるものに飛びつきたい破滅的で矯激な衝動に駆られ、それしか考えられない。

普通に他と均しく意識する分には災いではない。苦にならない。そのみを改めて強く烈しく求め、他が心情から震われるとき、事情は一変する。陋劣に執著すれば、小生以外の人間であると云う他者性が峻しく眼前に暴者の絶壁となって聳えるのだ。一瞥をもくれぬ無情の壁となってしまうのである。基本的に人は皆、誰かを意識すると多かれ少なかれ同様の感じを抱くのではないだろうか。

諦めるしかないのだ。人と自然に触れ合おうとするとは小生にとって瞬きを我慢するようなものである。心臓の動きをコントロールしろと言われるのと同じことであつた。

だがその翌日も同じ席に坐っている。坐つてじつと待っている。待ち伏せるかのようにである。暗鬱な眼差しだったに違いない。

諦められるわけがないのは、決断を下した昨日のうちからわかつていた。彼女の眼窩のクリームのような甘やかなラーションから離れられない。だったら思い切つて気持ち悪く告曰すべきではないかと云う衷言は条理である。だめで元々じゃないか、やってみなければわからないよ、と言つて人は微笑するかもしれない。一つだけはつきりとわかつていることがあつた。

彼女とは知り合いになれても膜からは出られないと云ふことだ。他者性への違和感（他者性と言ふこと自体が既に違和感の表明に他ならないのだが）を免れることはない。疎外感を拭えない。意識の緊迫を離れられない。畏怖を止められない。自己以外の存在に対して警戒的であることをやめられない。

やつてみなくともそれだけは断らかなのだ。もしも交際にまで漕ぎ着けても、ただ心労に果てるだけの、作り笑いのような人間関係しか構築できない。

小生にとつて意識とは絶望である。世間から隔離され、内奥に封ぜられ、焦慮することではない。自己の基底を喪うことであり、世界の一員であることを否定されることに他ならない。不安や畏怖の切迫ではない。だがわかる。人間すべては皆同じ構造を持つている。小生だけではない。ただ余人は眼を逸らしてしまっているだけなのだ。見せかけの平衡を失えば、必ずや小生と同じくなる。閉ざされた暗闇の中で今までどうやつて呼吸をしているのがわからなくなり、窒息感を覚えるように。

いったい、誰が意識から遁れられようか。どうやつて遁れ得ようか。遁れられるなどと云うことは空想のうちにすら不可能だ。そもそも空想すら意識の内ではないだろうか。併せて他者性からも遁れられないと云うことになる。一切が他者^もと云う以外の存在で脳裏に描かれることなどあり得ないからだ。何人にも爲し遂げられないどころか、他者ではないと云う存在の仕方がどう云うことなのかを解することすらかなわない。そこから遁れる以前の問題だ。他者性なくしては見ることも聞くことも嗅ぐことも味わうことも触れることすらも爲せない。

なぜこうでなければならなかったかなんてわからなかった。システムに蹂躪されて行くしか選択肢がないことのみがわかる。だから慣れは必須なのだ。

多くの人が麻痺しているに過ぎない。だが生きる爲には不可欠な麻痺だ。現実から眼を逸し、在りもせぬ蒼穹を憧憬せずして、どうして生きることに堪えられようか。都合のよい夢だけを観て、欲望の虜となり、狭く日々を凌ぐしかない。愛情や賞賛が實質的なものであると信じ、有意義や享樂や名声を信じ、それらを求め、希望を抱き、明日を期待し、行動する他にどのような肯定的な生存状態があるか。

よつて彼女にかくも恋焦がれながらも何も實働せぬ小生がごとき人物もまた愚かな欲望の虜となつて思いを馳せ、廻らせ、樂しむ。

彼女を、古代ギリシア古典期の彫像やルネッサンスの絵画やバロックの意匠やロココの衣装を鑑賞するかのように眺め、様々な悲恋や英雄叙事詩や落城の凄絶、神のごとき王たちの死を想像し、邪教の妖姫サロメの舞踊を玉座にて堪能するかのように陶醉する。

時刻が訪れると、ああ、ほんとうに彼女を欲するならば、今こそ去らせてはならない、声をかけて想いを伝え、心を捉え、愛の勝利者となつて天使の賛歌を天に燦めかせるかの、聖なる栄光を浴びなければならぬと云う強迫観念に襲われ、その度にいくつもの言いわけ

を案出し、彼女が店を出ると責務を免れた人のように安堵した。

いったい、小生は、これで何をしているのか。小生の生きているとは、何をすることなのか。何を求めているのか。ただ執著し、彼女と給仕とを見張っているだけである。彼女が他人と眼を触れ合わせることをすら受容せず、自らは異界にいるかのごとく他人事的である。どう云うことなのか、これは。

いや、畢竟、すべては愛されたいが所以なのだ。隔たりをばなくしたい。誰かに奪われたくない。他者であつて欲しくない。彼女が他の人と心通わすことがないようにしたい。なぜそれが愛されたい欲望に違反するのと言へば、よくわからない。ただもうそれ以外を考えられない。自分と一体であつて欲しく、自分のわからない部分があつて欲しくないと云うことしかない。彼女独自の体験があつたり、小生には知られぬ部分があつたりすることが赦せない。それが第三者と共有され、かつ小生の手が届かないものであることが絶対的に赦しがたい。

相手がどのような小さな戸口をさへ閉じても、ことを赦さずに一切開放しろと要求しているようなものだが、その癖自身は極度の猜疑と敵愾心とを抱き、自己の域が一寸でも侵されることを恐れ、保守の城壁から出られず、彼女に一步も近附けない。

小生にとつては対象でない自己を除けば、普通、自己もまた自分によつて観察される。すなわち一対象者たり得るので、敢えてこのような回りくどい言い方をさせてもらおう、すべてが異和を感じるのであり、脅威であつた。

生来の性癖とは言へ、情なくもある。彼女が他人と目を合わせ、言葉を交わしたぐらいが何だと言つのか。それが胸裂けるような悲憤なのか。小生に対する不義の行爲なのか。ああ、余りにも頑定ない。彼女が小生以外の他人と親しげにするなど別段のことではない。いや、もしそれがどうしても我慢ならんと言つたら、是非はともかく措くとしても、何か手を打てばよいではないか。打つべきではないか。彼女の心をこちらへ向け返らせる何かをせずに、心奥で喚いて現實の何が変わるのか。彼女は他者なのだ。思いどおりに運ぶものではない。いや、自分の手足だつて意に反して萎え衰える時が訪れるではないか。何かがなくは、何かをしなくては変わらないのが現實だ。そのことには根拠も正義もない。ただそうなのだ。

熟知しているくせに、でき得る限りに於いてさへも何をもせぬ者に、求め訴える資格があると言へるか。

小生がかようなままで彼女に何の約束もしてあげられないならば、彼女が何をしようが

自由ではないか。そもそも別の人間なのだから、異なる世界観を持ち、小生が知らぬ今日までの様々ないきさつがあり、人付き合いがあり、他者を寄せ附けない内的体験があり、独自の意志や思惑があり、推し測り切れない懊悩に身悶えた欲望があり、塩基の配列に組み込まれた生得の情念があるのは、当然のことである。

それが赦せないならば、もし彼女が小生の恋人になつたとしても、解決を見出すことがないのは自明だ。恋人になつたからと言って、すべてを掌中にし、すべてが意図に適合し、すべてについて意趣のままであると言えるような状態が来るわけではない。恋を實らせる爲のどのような行動を執つたとしてもそんな望みはかなわない。彼女が小生とは別の思考で物事を考え、別の皮膚で感じ、別の心情で想つことをどうにかできるものではない。

彼女をして異なつた世界の中で生きている事實を変えられない。彼女が他者でなくなることはできない。彼女の他者性を変えることはできない。

あたりまえだ。

彼女は現實の女なのである。また現實の女だからこそ愛執も生じる。現實の女でない女の愛を捉え、愛され、何の意味があると思ふか。

もしどうしても彼女の他者性をなくしたいとするならば、彼女と一体化してしまうしかないではないか。實際問題は擱くとし、彼女になるか、彼女が小生になるか、入我し我入するか、ともかくも同一のものになつてしまふ以外に成就する途はない。受精卵じやあるまいし、まったく以て蒙昧、五感児でも無理だとわかる。

しかし、それ以外に要請を満たす方途があり得ないこともまた一つの事實である。欲がそれを指で差しているかのようではある。實現の可能性を別にすればそれしか考えられない。

小生は論としてのこの問題に惹かれた。自身が直面している現實の問題を置き去りにし、没入し始めた。

考ふる。

もし望んでいることが、内奥に潜在する欲望が、そのうちことだとするならば、欲望は永遠にたどり着くことなく空転し、小生をして癒されることのない飢餓と渇渴とに駆り続け、死を迎える日まで安らぎを与えてくれることはない。まんざり足談とも言えぬように思えた。人間だ、人間だ、と訴えてみたところで、脳の基幹は依然として両生類やら爬虫類やらなのである。

かくも無謀な欲が未だ健在であつて一向不忠議のないものと思へ、小生の求究の欲はい

よいと高した。

現に彼女が他者として勝手に振舞うことに根底的な喪失感を抱いている。幼子は母親に對してこのような一体への欲求を抱くと謂われている。他にまったく寄る辺を知らぬ赤子などにとつては、たとえ一瞬であつても母が視界から消え去ることは、大きな喪失体験になると謂ふ。

小生はこの時点で彼女だけに偏つて欲望し、肯定感のほぼすべてを彼女に委ねていた。依存の現況にあつた。嬰兒とほぼ同じ状態であつた。

同じ条件がそろえば同じ状況に陥るわけである。嬰兒も小生も、ともに同じく人間だから同じ構造を有し、それゆゑ同じ症例が出ることに不条理はない。ただ人生経験の差異を考慮すれば少々情ないだけである。

されどなぜ自然は人をしてかなえられる害のない欲望を抱かせるのか。しかもただ單にかなえられないと云うだけではない。

もしも現實に対象との合致・一体化など云々といふことが起こつてしまつたら、どうなるのだろうか。

欣求していたそれを飲みとして感受可能であらうか。

彼女が小生と合致してしまふは、それはもつただの小生であり、合致前と何ら変わらないではないのか。そこを素朴な思いが泛ぶ。

確かに何ら変わらないに違いない。

感受とは、他者的刺激（他者的ではない刺激があり得ないので、これは冗漫な言葉だ。また刺激とは体感上既に感受に他ならないので、同義反復でもある）によつて起る反射である。刺激とは謂わば負荷に処る緊張（同じく負荷もまた緊張自体に他ならないが）、ストレスだ。ストレスが与えられて生じるのが感受（同様にストレスもまた感受自体に他ならない）の基本構造ではないか。手で物に触れたときだつて、抵抗感である粗さなどがあつたから刺激を受けて神経が反応する。他者性とは意識自体なのである。

またそれは諸考概の装束であり、他者性なくしては諸考概の具象が做せないのだ。見掛け上、考概化の別名義とも言つてもよい。

とすれば畢竟、合致とは意識の終焉を意味する。意識の終焉とは、あり得ないことではあるが、大変なことだ。意識がなくなれば何も彼もがなくなるからだ。意識とは世界であり、まさに瞬間を生きていると云ふことのすべてではないか。

よつて他者性、すなわち疎外感や乖離感と云うかたちを採らずしては、合致感も顕われ

ない。頭われようがない。端的に考えただけでも容易に解せる。

もし彼女が小生と合致してしまつて、そこに自分しか見出せなければ独りなのと同じ、
と言つか、文字どおりの独りである。自己と他者とが分明できなければ甲斐がない。自分
は今まさに合致している状態にあるのだなど意識することは不可能である。合致を果たした
満足が味わえない。

彼女が彼女でなくては合致の満足はないのだ。彼女の他者性、すなわち彼女と小生との
識別可能な状態を維持しながら、合致を果たすのでなければ満たされないのである。だが
そのような乖離性を残した合致が合致としての安寧を与えてくれるであらうか。

これは自家撞着である。

合致要請は構造的に矛盾している。小生の愚痴なる欲情は物理的に實現不可能なばかり
でなく、構造的にも絶対成就できない。

ならば合致要請などやめてしまふばよい。それだけのことである。苦しむばかりで實現
性なく、無爲であるならば、やめてしまふばよいのである。

と言つは簡単であつたが、到底やめられるものとは思へなかつた。息するとか、胃液
を分泌するとか言つと同じである。指大に感受される抵抗の粗きをやめることができ
るであらうか。

これは直観的には自明なことだ。

抵抗の粗きも合致要請なのである。あらゆる感覚もそうだ。

すなわち指大に感受される抵抗の粗きは、我々が認知する段階では既に『抵抗の粗さ』
と云う他者性（＝意識）を倣している。他者性とは或る種の脅威（関心を誘う因子）であ
り、脅威が脅威であるのはそれを脅威でなくしたい気持ちが含まれ、すなわちなくしたい
のになくなつていないと云うことである。

脅威でない状態、合致状態を望み、かつそれがかなえられていない状態であることがわ
かる。

かなえられないのは前述のとおり合致が既に構造的に表象不可能であること云う、異和が
なくば他者性も表象し得ない原的構造によるもの。

指大に感受される抵抗の粗さ＝『抵抗の粗さ』と云う他者性は、既に合致要請であり、
指大に感受される抵抗の粗きをやめることができないと云うことは、合致要請をやめられ
ないこと云うことをも示すのである。

『指大の抵抗』とは、生きている實感そのものなのだ。やめられぬのも無理からぬ。意識

そのものなのである。

生きていると云う感覚、實存、生きていると云うものであるがゆえに、合致要請はやめられない。

指矢の感受（『抵抗の粗さ』と云う意識）をやめることができないと云う、実践的にあたりまえて、直截的な体感には、かようにも強烈な源泉があるのである。

そこまで原初的なことを言わずとも、通常人間が稀なる豊高さを示す異性に執着するのは、避けがたい衝動ではないか。小生はこれを楽しめることなど考えられない。

また余人が所有せぬものを所有する優越に烈しく憧れずにはいられない。これに空想を廻らせずいられようか。

實際に、小生は一瞬たりとも彼女を想わぬときがない。高潔にして清廉なる異性を眼前にして、それが我が爲に取り乱し、我が爲に焦燥し、崩壊へと至る過程を眺めたいと切望せずにはいられない。優位の満足を求めずにいることなどできない。恋愛が優位性の確認を求める根幹的欲望に基づくものであることは知られた事實だ。

これら一切は自己肯定の様態だと言える。

自分の立場にとってよいもの、有利なもの、自己を實現するものを欲し、自分が他者に對して優位であることを希い、他に比して優位である、肯定的と言ふべき状態に至りたいと云う、欲望の基幹となる欲である。

また種としての存続への意志でもある。

比較的原始的な、暑さや寒さや苦しみを避けたい欲や飲食欲や生殖欲などもまた自己の肯定的状態を求めての欲だと捉えれば、自己肯定欲とは、生命の原理の原理であり、最深层に根附く欲望である。

死は生物的には最大の自己否定なのだ。

このようにまったく異和のない合致状態を求める。

すなわち合致要請は生の基底にある自己肯定欲と密接であるがゆえに、小生を凌駕し、かくまでも根源的に人間の現存の構造に奥嵌している（と言ふよりは、人間の現存を構築している）。合致要請は生そのものだとも言える。だから『抵抗の粗さ』は物理的にも到底離れることができぬ實在として現にあるのである。

なぜこのような苦勞がなければならないのか。異和がなくてはならないのか。なくては生が成り立たないからだろう。

むしろ生を、實存であるこの意識を成り立たせる爲にこのような仕組みが構築されたの

かもしれない。異逆が異逆であるのは生の爲かもしれない。刺激物の官感受によって意識が顛われるのではなく、意識の爲に刺激と云う特性が指定されたのかもしれない。すなわち生の爲に異逆との葛藤があり、刺激としての表象があり、他者と云う脅威（他者性）があり、次に起こる出来事への関心があり、他者性によって存在の不安や異逆を感じると云う苦しみがあり、その苦しみからの解放（全致）への希求がある。小生らがこのようにしていることと、生きていることそのもの、すなわち意識の爲にそのように指定されたのではないか。

それが意欲と云うものの實體であり、生存の原理となつて小生ら人間を（もしかしたら一切の存在を）衝き動かす。

生物の歴史は自分以外の存在が自分に対して異逆性を有し、自己肯定（生存）の爲にはそれらを轢し続けなければならなかった、と云う歴史であり、苦しみに駆られ（或いは欲びに駆られ）、そのようにし続けなければならなかった歴史だと言えなくもない。

とすれば自家撞着は終わりなく、生きようとする意欲を生ぜしめる爲の、生命の原理の必然性から来るのか。自家撞着の解消は無を招くことではないのか。いくら努力しようともここからは永遠に遁れられはしないのか。せいぜい棘の尖を少しでも丸め、毒を薄め、普通人の顔を装つて生きるしかないのか。

だが、なぜ。なぜ生が、意識がなくてはならないのか。この問いこそは存在の意味の究明であり、誰しも容易に答えられるものではない。恐らく小生ら人間が考えるような意味での答らしい答はないのだ。なぜなら諸考概と諸理とはその後から生まれているものであり、むしろ合致要請に基づく自家撞着を起す爲の絡繰りの一つに過ぎない可能性が想定されるからである。

そこには何もない。ただそうだからそうだしと言えない。事実だけが経緯もなく唐突に、理由もなく忽然と在るだけである。公義なく、だから識別も名稱もない事実ただそれだけと云う非情性、そこには空虚しかない。

珈琲が冷めていた。

小生は日常生活のこの場に突然放り投げられた者のように周囲を見廻す。すべてを異様なものを眼にするかのように眺めた。

翌朝は天晴れ好日であった。



小生は酸素を欲し、龍谷神社に足を運んだ。『サン・ミッシェル』へ赴きたいと云う、駆られるような衝動が俄かに勃発する兆しが見受けられなくなかったが、どうにも本気にならない。石畳の参道をたどった。鬱蒼とした樺木の太樹が連なり、神域を匂わせる。鳥居をくぐり、苔むしてあちこち欹けた石段を上り、境内に入った。神木の老杉を右に見ながら、本殿へと進む。

急勾配を做す檜皮葺の屋根に千木が高らかに交叉し、切妻妻入の春日造で、また龍谷独自の特徴もある。全体に屋根が大きく、床が高く、向拝の階段の傾斜が著しいことだ。屋根は破風から軒までを反り伸びて、広げた翼のようでもある。社本体の倍ほども幅があるように見えた。

向拝を蓋う屋根の軒下に社の柱と向拝柱とを繋ぐ虹梁が渡っており、龍の彫りものを做してそのまま向拝柱に絡み付き下り、参拝者に裂口を開く。

小生は逍遙した。古びた手水舎や石垣を眺めたり、杉の膚に触れてみたりする。楓の枝振りを愛で、露に濡れて黒っぽくなった樺の樹皮に苔の類が薄緑やら灰色やらの斑文を做すさまや、穏やかな起伏が息衝くような生命感を持つその樹幹が龍脚のごとくに見えたり、地表に明るい緑の苔があつたりするのに眼を留める。また葉桜の垂枝を見下ろしては地を這う大蛇を連想したり、本殿の背後にある杜はお社に蓋い被さるように勢を傾けていたりするんだなあ、などと不思議に思ったりしながら時を過ごし、次第に時間の流れが緩やかになるのを感じた。

普遍的な一般考概を以て眺めてしまえば、特段のことはない。だが精細巧緻を追えば錯亂し、たちまち豊穡となるその様相は捉えがたくなる。心を惹いて止まない。

この事態は容易に解明できる。

心惹かれて止まないとは、捉えたく焦燥し、葛藤していると云うことだ。捉えられないものはすべて意に背くからだ。他者としての他者性を帯び、異逆を做し、脅威を感じさせる。自己肯定を脅かし、存在の不安を覚えさせ、敵意を気遣わせる。

この他者性を排したく、合致に到達したく、あがく。結局それが他者への関心となるのだ。これが最も発達し、客観的認識を有するのが人間であると言えよう。

人間がその先鋭と考えれば、あるあらゆる生命が皆同様に、他者性に喚起され、関心が赴くよう造られていると見てよいのではないか。それが進化ではないか。発達の最大時にあるすべての幼い動物が様々なものに興味を示すのは、その最も端的な例ではあるまいか。とすれば脅威を覚えるこという情態は魅了されることをも含むのではないか。美が堪えが

たいと言われる所以もこのあたりの事情を指しているのではないか。

かように人間は苦しみと欲ひとに駆られ、他者へと向かう。合致を夢みて、自己以外の他者対象、たとえば卑俗なところで金とか女とか物中とかに自己肯定の理由を求めるは、こうした理由からではないか。

高度に発達した認識がより客観性の高い認識へ向かおうとすることは、こう云った原理からではないか。より自己の例外へ、自分の外へと冒険し、新しいものを、鮮やかなものを求め、外部へと飛翔せんと欲情し、そこに於いてこそ、いや、そこにしかリアリティを発見し得ないのは。

だが無論、成就しない。相も変わらぬ自家撞着に襲われる。

仕方ない。他者性が持つ異逆、離反性と言う象りが、諸考概の彫像にたちあふれながらつたならば、剋され、鞭打たれることもないが、興味の情も味わえない。と言うか、生きる欲求が生じない。

小生が彼女への欲を逐げられないのは幸いなのかもしれない。自然を捉えられないのは素晴らしいことなのかもしれない。捉え切れてしまえば、生き甲斐などない。魅了されることもなくなる。捉えられるようなものが現実的なもの、切實として感じられるか。いや、それ以前に捉え切れて安寧してしまうようでは、未来への心慮なく、人生を做すべき理由がなくなる。

人間の認識が把握する便宜の爲だけにあると考えれば、いかんとも解しがたい現象ではある。

しかしながら、生きる意欲を駆る爲に、この絡繰りがあると思えば、すつきりと嵌まる。他者性がなぜ異逆性なのか、なぜ他者性を維持した合致があり得ないのか（他者性を維持した合致があり得ないのは、直感的にはあたりまえなことようだが、よく考えると明晰な必然性はない。だが合致させないとどう意向が先にあったのだとすれば、不思議はない。コペルニクスの転回という奴だ）が晰らかとなる。

他者性は他者に事實としてある本質ではなく、こちら側（と言っても小生の、ではない。小生の生存の、である）に内在する動機の内在であり、こちら側から仕組んだものなのだ。初めに不一致と云う結論があり、それ以外の一切は見掛上の体裁、事務的な処理ではない。

自家撞着するように構築されたから自家撞着するに過ぎない。かくして人の執着を熾し、より強く烈しく渇き求める焦燥の怨霊と做し、生へと向かい続けさせる。一切はその爲だ

けの架空の絡繰りだと解すべきなのだ。

宇宙的な原理に基づく問答無用のこの絡繰りは必需のものなのだ。いいじゃないか。お蔭で意識、世界、生きることがあり、すべてが捉えがたい豊穠の様相を顕在させ、人生の妙義を做す。

あはは。善哉。よきかな



二日後、辛抱堪らなく、真神まがみ鉄道に乗って難久菰駅へと向かった。

店には誰もいなかった。いや、客はいた。店長がいた。店員もいた、あの男を除いて。そして午後五時まで待ったが彼女は来なかった。翌日も同じだった。翌々日もであった。彼も彼女もいない。

「あの」

「はい」

多分學生のアルバイトなのだろう、ウエイトレスが怪訝そうな顔をした。

「ほら、前にいた彼、こんな感しの髪型でさあ、背が高かった」

「斉木さんのことですか」

「そうそう。そうだと思います」

「辞めちゃいましたよ」

「何で突然に」

「さあ、染物屋さんを継ぐんじゃないですか。何か、急にその気になったんだみたいなこと言っていましたよ」

「染物屋だったのか。どこにあるの」

「歟邸ほむぢだったと思いますが。以前はすごく嫌がってたんですよ、継ぐの」

小生が歟邸ほむぢ駅を降りたのは午後四時ごろであった。

貞観じょうがんしやういへ正國寺に向かう路を途中で少し外れると藍染ひしや菰屋はあった。眞神の藍染めは伝統ある手工職だ。古くは眞神灣に泛ぶ安房島の社に奉納する布に龍神の紋を藍染めで入れたと云う記録が残され、江戸時代中期には既に名が知られていたらしい。

菰屋は敷地を白い塀で囲んでいたが、一部を割いて店舗としていた。商家と言うよりは工房と言っべきであった。楠や榎の太木の狭間から母屋の堂々たる薨が広がっているのが覗かれる。店夫の方へと向かった。店内は狭く暗く、棚に無造作にたくさん染物が積み

上げられ、店番の老婆が小さく坐っている。

何もわからなかった。離れかかったが、怪しく見られても困るので、駅へ引き返さざるを得なかった。

電車に乗り、考える。

二人は終に結ばれたのだ。彼女の爲に彼は正業に就く決意を固めたのだ。小生はそう思い込んだ。所詮が絡繰りなのだ。實體はない。苦患に価わない。恋慕する人を失うことに失恋と言う事實性はない。すべて駆る爲の架空に過ぎない。

しかし、現に人々とともにこの渦中に生きていながら、独りきような省察をすることが楽しかろうか。愚か者どもともに妄執し、吝しみ、妬み、恨み、嘆く方がまだしもましではないか。

家で寝るしかなかった。

その後数日は猛然と小説を書き綴り続けた。原稿を破り捨てた。時々寂寥を玩味する爲に『サン・ミッシェル』に寄った。曹洞宗建長寺派龍藏大嚴寺に参禅し、某大學で『ハイデガー』、それは何か、存在とは』を聴講し、一週間で二十七冊を読み、豪雨の日に裸体で三和畝山に登り、樺木に絡む葛蔓にしがみつき、烟る谿を睥睨した。

執著は諸々の細胞の隅々にまで染み渡っている。心は欲し求める。欲し求めても身が炙られることと焦られるだけではない。涸渴が癒えることがないのは自家撞着のせいである。わかつたつて足しにならない。せずにはいられようか。無爲であつても現實であつた生存に封ぜられている。絡繰りを疾駆するしかない。

自由が欲しかった。この苦しみから、焦燥から、生存の鞭から永遠に逃れたい。

なぜ小生は普通に現實と闘えなかったのか。彼女に交際を求めればよかったではないか。好かれるように工夫すればよかったではないか。誰でもすることではないか。なぜ普通の人は普通に振舞えるのか。

なぜ小生は臆病なのか。

なぜあつと言ふ間に彼女が小生の存在肯定のすべてと化し、彼女を喪つことがすべてを喪つこととなり、生死の問題でもあるかのようにいとも簡単に追い込まれてしまったのか。なぜこゝも脆弱で寄り憑き縋る島を求めておのれない浮遊なのか。なぜ人より不安定に陥り易いか。不安を生ぜしめる物質が脳内に分泌され易いのか。なぜ小生は幼少時から自己の存在の均衡を失っていたか。なぜ生まれつき他者性が露わな牙を剥く姿が見えていたのか。責めらるべきは小生である。だが小生は選択したわけでも敢えて做したわけでもない。

余りに理不尽ではないか。だが理とは何か。理が何だと言うのか。理が通るくらいなら不幸があるか。一切諸考概が絡繰り措置の爲の架空の便宜であり、諸考概たる本質性なく、無効であると言つのに、これらに構築される理が廢墟でない筈がない。人間を焦燥に駆る爲の絡繰りでしかないそれに、仁義などを糾しても声帯が空気を震わすに過ぎない。

なぜかを、何者であるかを問うても答えはない。永劫の葛藤を生起せしめる爲の自家撞着、その絡繰りが在りだけである。すべて事務処理でしかない。

このとき小生の脳裏に一つの疑問が及び、茶室に端坐したまま、微動すらできず、猜疑に囚われた。

それはこう云つてであつた。

我々は絡繰りに気が附くことができる。無論、構造的に許されているからだ。しかし何ゆゑ生存の構造を做した者は、絡繰りを垣間見させるのか。もし生の存続のみが目的であるならば、隠匿したままでいた方がよかつたのではないか。これほど巧緻なる創造者が敢えて見せるからには、絶対に意図がなければならぬ。

だがいったい、この絡繰りを知らしめることでどんな効果を創造者生存は期するのか。それは絡繰りを発見した者がどのような情態になるかを分析すれば解明を得るに違いない。小生はこれを垣間見、どうしたくなつたか。どう云う気分になつたか。

問うまでもない。

自在奔放になりたい。炸裂するがごとき威勢を以て執著を振りちぎり舞い、生存とどう絡繰りを打破したい。

狭陋なる我執の繰り返しを解脱したい。脱自エクスタシスの空間へと躍り出て、広大無辺の歎びに拡散し、前後左右上下を封じろる壑を超駕し、外部になりたい、無限大の宇宙に、客観性になりたい。

だがこれはどう云つてなのか。生存の法則に叛らうことなのか。なぜ生存がそのような設定を做すのか。自裂行爲か。

いや、それは思えなかつた。これが生存の法則に叛らうことだとは感じられなかつた。むしろこのような威勢こそが生命そのものなのではないか。これが平常なる生の状態とは言えまいか。我々は生存を誤解してはいないか。生存とは生を做し、存続させようとする、ことだけが趣意なのではない。

小生には強そう考えられ、眩暈をすら覚えた。

生存の本欲とは、脱自、生を折裂させることではないかと直観したのである。

そう云う風に措定すると、何のことはない、存続と云うことが拡大の属性の一つに過ぎないと云うことに思い至った。拡裂とは、存続し続けることを含んでいるではないか。

小生は陶然とした。これこそが眞の生存の法則なのだ。絶対にそうでなければならぬ。

このような高揚感が眞實でないわけではない。

強弱拡散、あたかも陰極まつて陽となるがごとく極外へ、顛頂を踏み砕いても高く天翔しようと欲する。常に自己の例外となつて自己を乗り越え、より強くより大きくより高度にならうとする。

これが生ではあるまいか。自らの現状を常に不満、すなわち否む者としての自らをも破砕し、自らを喰らい尽くしてしまふ原蛇のごとく、想像を絶する境涯へと逝く者となる。

これが生存の絡繰りの實像ではないか。自家撞着に始まつてこれを呑め自ら超越までがその全体像ではないのか。自分自身を超えようとして身も裂き砕き天翔躍すること、これが生存なのだ。

そう思えば、ありとしあらゆるもの、自らをも觀察の対象とする意識の一切が異逆であり、非情であること、すなわち他者性を持った冷徹な他者であること、この世が非道であることが脱目への志向と云う義に於いては義しい。他者の冷徹があればこそその克服がある。だがその爲とは言え、なぜこのような回りくどい手続きを取らなければならないのかは依然不明だが、その答はもはや答以前の場所にあるに相違ない。

いずれにせよ、異逆と云うことは異逆と感ずることであり、異逆と云う抵抗感はその異逆を回避したい、解消したい、超越したいと云う願望の頭われであり、その爲に自らの殻を破り、自らの外部に出て自らの例外となり、客観を得て異逆を綜合し、より高度な脱目態となる。より拡大炸裂する。これこそが小生らに閑察無用に与えられたテーゼだとすれば、他人が小生に脅威であり、敵意があり、理不尽であること、世界が無道であることは道理に適ったことなのである。

この客観の極みはあらゆる主観性を超越し、やがては空に達するのである。なぜならありとあらゆる意識、他者性の頭在とは、我と云う想い、我がものとなる執着に因して成立するからである。それらが究極の脱目により霧散すれば、無分別無差別な空に移行することは必定ではないか。

我執の寂滅であり、敵をも愛することに繋がる。

そう考えた瞬間、小生は肉体の殻を脱いで自由となった風の気概に襲われた。かろらかに、身が蒼穹となったかのように、涯しのない清澄となり、あらゆる重さをなくし、不死

を覚えた。受難を超克した殉教者のように、無辺なる法悦の恍惚を以て超然とする。天頂から雲海を見渡す無際限の自由であつた。筆舌に尽くせるものではなかつた。烈しい陶醉を覚えた。

だが。

茶室は日暮れて薄暗くなり、小生は既に現實に戻つていた。かららの境涯は疾くに去つていた。

陶醉はわずかな時間で終わったのである。

小生は早くも自らが今さつき得た境涯を不満足し、焦慮の情態へと復帰してしまつていたからである。これもまた執拗に問い糾さねば氣の済まぬ性分、細密に、精細を以て常に閱せねば安心できぬたちの成果であらう。残酷な科學性を以て無慈悲に刹那の幸福を捉え、それが醜い哀れなものであることを暴くまで執拗に解析しなければ氣が済まぬのだ。性癖が小生に強要するのだ。内奥からの神経性の強迫と言つてよい。

恐らくは喪つことが怖いのだ。だから自ら裂かずにいられない。たぶん不安物質が脳髓に分泌され易い體質に生まれ附いているに違いないのだ。だから幸福感が赦せぬ性癖を做すのだ。

これが解剖學的氣質の意匠に隠された人間的、生理的な動機だ。休む間もなく次々と猜疑の心情を小生の胸中に構築するのだ。そして小生ながらこの自然の摂理もまた、現在への不安や猜疑から現状の安定に不均衡を齎し、到達した現形からさらに脱皮しようとしていると捉えるならば、やはり根底に超越への志向が何らかの関与をして蠢いていると見るべきであらう。

さてその猜疑の内容であるが、それはこの超越運動が小生の自由意志でなく、小生と云う自然現象の自律的な動きであるという点にあつた。だがそもそも小生の意図した意識がいつあつたか。なかつたではないか。

超越の狂裂拡散が生存の本欲である以上、これが生存と云う自然現象の上にあることは、当然と言えば当然である。我々は有機物の化學的反応の上に刹那的に構築された現象である。いかなる意向も諸細胞から発する他はない。何をか欲しようとも、いかようにか考え、企み、何をか志向しようとも、すべては同じことではない。

これはほんとうに解脱なのか。自家撞着を遁れても、ただ次の絡繰りへと絡め捕られに逝くだけのことはないか。

根本は何ら変わっていない、一つの段階を終えて次の段階に移るだけのことでないか、

新しい絡繰りに改めて嵌まるだけなのではないか。

儘かに生は拡大し続けようとしているかもしれない。陋劣を解脱しようとするのかもしれない。自家撞着を超越しようとするのかもしれない。だがその意志は誰が生み出したのか。少なくとも自分ではない。いかな意欲もインパルスでしかない。諸細胞の働きでしかない。化学的な現象の上に成り立っているのである。

小生を自家撞着の罟に絡め捕った力と同じ力が小生を運ぶに過ぎないのだ。同様の自然の摂理による、生存の原理の上での出来事である。たとえそれが自家撞着の超越であったとしても、本質的には自家撞着に翻弄されているのと同じなのである。

だが諸考概は無効ではなかったか。しかしそれを言ってしまうば最初から問題などなかったのだ。それでも晰らかに実存的に苦しみはある。小生らはこの現実を實地で往くしかないのである。

それにまた同じ生存の原理上にあるからと言って超越後のそれが不幸なことだとは限らない。自家撞着を超越されれば、人における幸甚なのかもしれない。逝つてみなければわからない。想像するのみでは無意味だ。

だがその前に、いったい、どうやつて自家撞着から遁れられるのか。

すなわちここに至るまで論を運ぶ必然がないのではあるまいか。自家撞着の超越など現実問題として考えられようか。ありもしない夢の餅菓子を目の前に餌としてぶら下げられているようなもの、これ自体が一つの自家撞着、自家撞着が小生らを駆るその構造と同じではないか。

仏教ですら生存中の解脱は完全な解脱ではないと説いている。生命維持の爲に食や呼吸を要するからである。合致要請を完全に捨てたとは言いつれない。仏陀その人でさえ、死の病に斃れたとき、涸渇して水を所望したと伝えられるではないか。

仏陀が渴喉を癒す爲に水を乞った。その自然の事實を志野焼きの膚のように、ありありと想つ。

小生は徹苦を禁し得なかった。だがいずれにせよ、絡繰りからいくらかでも脱し、たとえば人間が類人猿などに比べ、いく分か生存の絡繰りから自由であるように、今の人間より少しでも高次となれば、ましになれる可能性がある。『まし』であれば『まし』でないよりは、『まし』な筈だし、苦しみに遭う者にとつてすれば、治癒でなくとも鎮静剤がどれほどありがたいものか。

だが哀しいかな、小生とは言へば、観念ばかりが先走り、その『まし』にすら到底及び

もつかない。兆しすら見受けられない。

依然として彼女が小生とは異なる存在者であることを、小生の意向を疎外し、一瞥さえもくれない他者であることを、触れることすらかなわない、異なつた事象であることを受諾できない、彼女が誰彼を愛するが彼女の勝手であつて、小生の抱き纏ふべきところではないわと笑えないし、彼女と彼とを祝福するなど、絶対に心が従わない。

茶室に端坐し続けるのみであつた。一步も進捗しない、惨めな小生がただ独りここにいるだけである。

彼女が彼を愛し、彼らが睦み抱き合う姿を想像すれば、胸破る憤激や自暴自棄な哀しみに引き裂かれずにいられない小生が独り、暗くなつた茶室で、微動もせず蕭然としているのみであつた。

かくて半年、家業を手伝う。その間、各社新人文藝賞に応募したりもしたが、第一次選考の壁に阻まれ、既に小説家への夢は果てていた。骨董もまた愉しからずや。日々は安穩であつた。現實から眼を逸らし、麻痺し、夢遊病に陥ればよいのである。これもまた逸品の缺けたるに似て、妙観が刀のごとくおつならぬものかは。

さて。かく翳り帯たる幸福に浸され、自らを楽しみ憐憫し、寂寥と憂鬱との甘美に抱かれたながら過す日々にも慣れ、茶陶に凝り出し、土味がどうのと言い始めた頃のことである。

何の用事があつてそんなことをしたのか、はや憶えてはいないのだが、或る日小生は晝翁の隣室にある桐の戸棚を開けた。別段珍しいことではない。普段からすることだつた。一々理由を憶えていないくらいに。

そこには代々収集した茶陶が蔵されている。箱に収められた上に袋に入れられたものから、ただ紙に包まれたもの、剥き出しのまま置かれたもの等々のある中で、志野焼に目が留まつた。手に取る。傾けたりしながら、景色を眺めた。

粘土を踏み押し空気を抜いた上で捏ねて整形し、釉を塗つて重ね、窯を以て高温で焼いたに過ぎぬものである。ただの焼かれた土である。冷えた感触が掌や指先にある。凹凸の起伏の感じがある。

経緯もなぐ余りに唐突に、奈良の大神神社の記憶が甦つた。千鳥唐破風の拝殿の奥太には、ただ脇鳥居を左右に附した二輪鳥居があるのみで、その後には盤座を有す二輪山が聳えるばかり、本殿のないさようなまがまがと泛んだ。

志野陶の気泡の抜けた跡や釉薬の罅などが草や木や土や蟹や雫や蛇や蟋蟀や風や露であ

った。風雪の過ぎ去った幾星霜もの跡であり、儚い雑草や昆虫の短い生涯の繰り返しであり、黙して語らぬ大樹の威圧の古殿であり、それら自然は謂わば途方もなく古い存在である。驚嘆すべき老嚴である。幾星霜をも経た者のみが持つ古叢を燦らせ、幽玄の雲霧を霧かしめる。人間の言説考概を寄せ附けぬ神威を帯びた彼の實存的な叡智は小生らの持つ諸考概の空架な装束とは遠く隔たった、實在するFORCEとしてあり、眞の燦たる光射を放つ聖の聖なる叡智であつた。

あなたの天叡をお与えください、小生ら人間はどこまで逝うとも、この廻りから逃れられぬのです、何卒お救いを、理叡ならぬ天叡を、實存する眞なる叡智をお与えください、苦しみと不安とに苛まれ、烈しき憂鬱に纂奪され、凄まじき妄情に憑かれたる魂に平らかなる清爽を、光茫を倣す恩寵をお啓き示してください。

小生はそう懇願した。だが嚴かなる古老は軽らかに笑つ。

『愚かな。おまえは何を言うか。わしに實存を訊くと申すか』

『そうです。逝にしへなるあなたが薫らせる古く深い聲、言説論議に拠らざるがゆえに動ずることなく、實體ある實存の、實存となう名の叡智を哀れな小生に、公與ください』

だが嚴は手を振って物憂げに顔を背ける。

『愚かなことを喚くもの哉。古今東西いづくにか實存たる叡智のあらんや。頑是もなくもよしなしごとを申すものよ。太古より存在せし者に嚴肅なる實存の天叡があるとおまえは言う。だがそもそも實存とは何か』

『とても言葉にはできません。本質性を抱く諸考概には嵌らないものだからです。諸考概は本質のエクステンション^延です。しかし實存は依拠すべき本質を持たず、非情の切實性で人間を領し、常に現實問題として是非もなく人間に選択を迫ります。

考概としての存在ではない人間にとっては、それは眞止^{まど}しく『罪』です。但し考概の『罪』ではなく、『罪』となう考概に本来期待されるべき、『罪』にすらも悲さる非情の城壁のよう聳えています。

だから實存は小生らをして限界を超えた畢竟の脱目へと導く。小生ら脱目を志向するとも無限輪廻でしかない自己超越の繰り返しによる生存の絡繰りからは遁れられません。なぜなら何も彼もがこの脱目運動永続化への志向でしかないからです。諸考概がこれの爲の罠でしかない。先に脱目志向があつてその爲にその後、全てが構築されているのです。到底人間の智慧では遁れられません。教えてください』

『愚か者が。ならば教えるようがあるか。そもそも知らんわ』

『逆に言えばそれが事実として存在するときの空の現実的な存在の仕方ではないでしょうか。空と云う本質考概には嵌まらない、理叡が做す本質ではない、事実的な空の在り方とはどう云うことではないでしょうか。非知です。なぜなら事實は非理叡的であつとも非情なまでに厳肅なる事實としてあります。』

非 ありうへからいひ れば眞 ボシトウム。それが現實と云う積極的なFORCE、事實として實存するリアリティ、是も非もなき事實ではありませんか』

『だがどう云う空もおまえの思考の産物であり、理叡性に支えられ、構築されたものではないか。』

呆れ果てた奴よ。人間どもの相も変わらぬ手戯、いつもながらの堂々巡りではある。空転する絡繰りを駈る愚昧な鼠のごとくに永劫に幻想を弄つて戯れ、無爲徒方に倦むをも知らず、空想を玩ぶ。愚かな。

世にあるは只管現實のみぞ。それ以上もそれ以下もあるか。しかしそう説いてもおまえらは更に現實を考概にして手戯に替えてしまつ。『現實が答だ。つまり答はない。我々はその都度、対応するしかない。それが答だ』と。そう云うやり方しか知らんのだ。やめろ、やめろ。さような手戯、聞きたくもないわ。重壓で徭苦しく煩わしきと苛立つた空燥と苦患と疲弊とに満ち盈ちておるわ。實存しやと？

おまえには未だわからぬか。さまでも申すぐま、あたかも摩訶般若波羅蜜多心経神咒の義を叙さんとするかの哀れ』

ぎやうていぎやうていはらぎやうていはらでうぎやうていぼじそわか
羯帝羯帝波羅羯帝波羅僧羯帝菩提沙婆訶

小生は既に廊下を歩いていた。既に下駄を突つけて庭に出ていた。

すなわち既に茶室へと向かつていた。坐す。炭を熾し、茶釜を掛けた。炭斗から炭を取り出す。香を炉にくべた。野雁の羽簾の下に隠れていた桑柄の火箸を指にはさむ。湯気が立つてきた。碗を掲ぐ。棗を開けた。竹の茶杓を攫す。

白竹一本樋の、中ほどに竹の節がくるよう詭われ、蟻腰という見掛、丁寧に漆拭き爲れたその竹篋は棗を包んでいた裂の傍らの畳の上に落ちていた。



— 本文『實存的分析による解釈學としての普遍的現象學的存在論』 —

「うのはながき、ですか」

「そうです。」

銘『卯花牆』。うのはながきさよう呼び倣わされておりまする名碗があるのです」

「ほほう。で、こちらが」

「さよう、推定の限り同じ技法で作られてあります」

「そつくり、ではないのですね」

「及びもつきません。」

本物は桃山時代に作られました。それに似せてくれると曾祖父は頼んだらしいですが、そう言われて違わず造れるわけがない。眞似しようと欲して倣せるくらいのものであれば、もとより名匠が苦節など要りはしません。誰か見紛うものでしょうか」

小生はそう言いながら彼の顔を見ぬまま白志野焼を手にし、愛でる。岐阜県東濃地域いわゆる『美濃陶』の類、淡黄白色の素地に長石釉でしっとり白濁した深みある光沢だ。気泡の抜けた痕跡が数多あり、小孔と謂う。焼成の段階で釉の表にできる罅割れは貫入と呼ばれる。

素地きじに含まれた鉄分が赤い斑文となり、表面に幽玄あやうれるが火色（または緋色）。ベンガラなど鉄顔料を以て刷かれた絵の上に長石単味の乳濁した釉薬をたつぷりかけて焼成すると、釉が半透明の白斑しはんを做し、図柄がほんのりと浮ぶ。それが鉄絵である。

「わかる方にはわかるんでしょうねえ」

「ええ。しかしね、気にはしていたようですね。」

高台をいひだい覽なさい。そこに曾祖父自らの名と、年号の昭和二年とを刻ませています。

まあ、身内みうち疊かさね肩かたなどと言われるやもしれませんが、けして人目を欺あやうとしたのではありません。

それはさて置き、そう、古色がないと言われる。まったく道理ですよ。お見込みのお通りです」

「いや、いや、無も。いや、恐縮です。」

しかしまあ、贋作と云うなら、いたし方もないところでしょう」

『贗作？』

ふ。

「されどそれなりによい」

「はあ」

「同じ碗はありませんから」

「そりや仰るとおりですが」

「おや、怪訝そうに眉を顰められる。疑義すべき余地のない事実と思われませんが」

「無論ですよ。しかし」

「では、伺いますがね。汝爾なんじはこれと同一の器物をどこかで、（なんじ）覚おぼになったことがおありですか。

すなわちこれとまったく同じく一毫たりとも成分の種類や量の異ならない陶土（一塊の土を二つに分けても双方まったく同一と云うことはあり得ないでしょうね）を以て做され、まったく同じ起伏を孕んだまったく同じ形状の、まったく同じ志野釉の使われたまったく同じ色合いを做し、まったく同じ位置にまったく同じ小孔やまったく同じ貫入のある碗を、（なんじ）覚おぼになったことがありますか。

あるわけがない。ないからです」

「まあ、科学的にと言いますが、厳密に事実と照らし合わせれば、そう云うようなことにもなりませんが」

「科学も慣例も日常生活感情もへつたくれもない。今言つた以外の何者でもない。

だがこの碗も他の碗とともに『碗』の名で扱われている。『碗』など、豪えいく大雑把ざつぱにあしらわれている。蔽おほわれてしまっている。一括りにはならない具象の精緻細密の燦爛が均されてしまっている。酷いものです。まど慥しつましき不粹

だがそれでもいくらかはましでしょう。

もしこれが人間以外の生き物から眺めたなら、どうでしょうか。ただのかたまりではありません。茶碗も鍋も漬物石も皆同じです。自らにとつて何らかの關係がない限りは、餌の入る容器物なら好ましいもの、畏おそみであれば危あやうきもの、そんな程度でしょう。鍋であろうと漬物石であろうと餌が盛られれば同じく好ましきそれなのです。

さよう鑑みればこれ認識発展の歴史とは、対象を精細化明晰化し際立たせ、独立させ、自己と隔てのある、自己の主観に影響されない自立的、客観的な存在に仕立てることであり、それはまた自己の狭隘を低く抑えて公的、一般化するところでもある。分離独立を促し、

他者化とも言えましょう。だがこの人間の認識運動の動機は實はその逆にあるのです。

分離独立させながら、同時にそれを認識することによってそれを取り込む。つまり従前以上に乖離したものを取り込むことによって自己を拡大し、自己肯定の諸元を増大させ、異他の範囲を減することです。

さて、話が飛びました。

つまりは人間より他者化のレベルが低い動物らにとって認識対象とは自分にとってそれが何であるかと言ふことであつて、自体が一般的に何であるかと言ふ情報を必要としない。まあ、よくよくは人間も同様ですが、ともかくも人はそれ自体として独立した客観的な何かであることを受容してはいる。他者として存在することを是認することができる。それをそれとして把握している。一応は。

そう比較してみれば、いかな大雑把な括りであしらわれているとは言へ、いくらかまし、とは言えるのです。

しかし、これは人間以外を侮る意味ではない。どうしてそんなことができましようか。

『碗』と観ずる人間と、ただ好ましいものと把握する動物らとは實際、相違はあつても境目はない。

わかりますか。

『碗』を物として一般化し、捉えられる人間と、自分にとってのシグナルではない動物らとの『想い』の差異は存在するが、差異の境界線は明晰ではない。

小生は人間と動物らとのいずれの『想い』もともに諸考概と同じく呼びますが、實情兩者のそれを一概で劃すことがかなわないからであります。

なぜなら、諸考概の一切は、生物が生きて来た経験を累々と積み上げた歴史の産物だからです。その累積は層と層との境界線を持たず、無限とも思われる重なりを以て遺存するのです。

今日ある諸考概一切は、小生らが単細胞の生物であつた時代（或いはそれよりも前）からの重層です。それは縦の重なりでも横の重なりでもない、奥行きのある層です。

さあ、開けたままのお口をささいで戴きましようか。汝爾にお訊ねいたしましょうや。

畢竟、我々の生きる世界をどのように考えられるか。

炙られた鮑じゃあるまいし、むずむず唇を動かされるのみか。

わかりました。いや、もうよい。ともかくもお聴きあれ。

たといは生きるとは、世界を持つことに他なりません。他者からの干渉や他者を以て做

す情 思料や活動すべてです。それなくしてはいいたい、いずこへか足を向け、耳目を傾け、何をか志せと言うか。一切は他者との関わりに他ならない。自らの殻からの超越です。

アメーバのような生物であつても、世界観を以て生に臨み、そこには既に諸概念の揺籃期イデアの姿があります。先天的に内奥在し、いずれからともなく湧き出する動機に衝き動かされて世界を做し、世界へと超越するのです。

虫類が飛んだり、蠢いたりする運動空間や細胞内の有機的な化学反応も一つの世界であり、諸考概の太祖廟です。小生らの脳幹の上に爬虫類の脳髓があるように、数億年来、最も単純な諸活動から積み上げられ、その結果が今であり、我々は生まれ出たときから既に全世界を知っているとも言えるのです。

世界観は『生きている』と云う現在形それ自体であり、生命発祥の動機を源泉として噴くのであつて、外界の模写として生じるものではありません。

この奥在する動機が生命の物的原理である諸細胞の化学的反応にも遡れるとすれば、あらゆる物質的反応も同様諸考概に連なると言えます。すなわち有機物、いやそれに留まらず、無機物も諸考概を持つと言えないでしょうか。

これが発展し、生命を維持継承する爲に必要となる一定の刺激に対する反射、すなわち最も原始的な世界観となり、やがて行動と情動とが境界のない緩やかな分節を做して反射が内部的には感受としての情態を做し、他者は行爲を促すシグナルとしての存在となり、いつしかこれを概括、区劃して二顧の対象たる自立性、自分以外の客観的存在であると云う普遍性を附与し、独立した存在一般と做し、俗に言うところの諸考概となつたと考えれば、境界の曖昧も当然と言えます。

實は小生、これら世界観の変遷史を概観するとき、この運動全体が自らの殻に留まる閉鎖性を拒み、より外へ解放されようと欲して解脱を求む志向性を有するかのよう観ぜられるのです。脱自態エクスターゼたらんと志向するかのよう直観されるのです。物質をも含めた全体がかう運動すると妄想するとき、まさしく宇宙開闢のビッグバンが既にその性を持って生誕したかのように感じられるものです。

宇宙が拡大し続けているのと同様に、当然その一細胞である人間も、脱自態を志向し続けている。仮にそうであるとしましょう。

とすれば、到底諸考概の大雑把さに耐えられない。もつと際立つて独立し、多くの情報を盛られ巧緻に、高次の完成に及び、より精細であるリアリティを欲す。より自己に関わらぬ他者の極限を求める。

現在のうちに、一つ義を以て強いて收斂された平坦な諸考概に満たされない。より高度な他者像より複雑な精緻な動的捉えがたさを欲する。たとえば

「いや、こゝ高説はあり難いですが、わたくしは」

「承りかね候。

小生今や興趣の情が叙詩神のこゝ鬱勃とし、いかにしてこれを叙べ尽くさずにいられましようか。本日、汝爾にあつては一生涯の褒授の日となります。

さあ、神託にも等しい我が言説、こゝ聴従あれ。

しかしまたその前に序叙についてのこゝ聴従を願う次第。小生がこれから語るところの神説は一切断ることなくとも、『小生らに於いては、と云う限界附きのものである』と、飽くまで小生らにとってはしかじかであると言ふ、小生らに観せられる限界で有効と限るものであり、ただ小生らに直截せう言うように観せられているまでのこゝに過ぎない』と云うことを厳密に定義して措かせて戴きましよう。

なぜなら前提となる諸々の条件を無条件に是認しない限り、小生らは一步も歩めないからです。小生らは既に定まつたフォーマットから出発するしかあり得ない、これを無効にしてしまつては宇宙空間で上に逝けとか下に逝けとか言われているようなものです。そもそも無効とか否定とか疑うとか問うとか糾すとか是非とか適正とか眞偽とか實証性とか既定とか客観とか判断とかそれゆゑそうではないと云う論の運びとか、ロジカルな一切が既定のもの以外の何者でありましようか。そもそもそれが何者であるかを言つても、飽くまでフォーマット上で糾すことではなく、小生らの直観するところによればフォーマットの適正を實証するにはフォーマットを外し、その外部の客観的視点から明証されなければならない、そうではない實証には實証性が缺如するとされてはいないでしょうか。そう云う論理の必然的運行もまたフォーマット上の定款でしかない。しかも、だから駄目、と云う判断も同じです。

で、だからどうしようもない、と断じてしまつことも同じ。こゝで云うフォーマット上の絡繰りや『フォーマット』と云う在り方・スタイルへの批判自体がフォーマット上でしか機動できないと観せられ、この外に逝きようもないから、この段に至つてはもつとてちかくても候。なような気持ちから『そう云うように観せられているまでのこゝに過ぎない』と無根拠未証左であることを断つて擱くことが最大限の努力、小生らに直截せう観せられていると云う以上にはもつと言えない、半端な断定です、と云うお断りです。

さあ、この問題は切りもなく、かつそれ以上には言葉も考概ありません。話を戻

さねばなりません。宜しいか。いやいや、窮極限眞實不虛大論議を大々々敷衍いたし候
さて。まずは小生ら人間が何ゆゑ世界を形骸と見做して倦み、リアリティなきものであ
ると観取し、これに覺えず焦燥しているかを気附かせて進ぜましょう。知りて後となれば、
外への解脱を欲さずにはいられなくなりましょう。

第一に諸考概を以て做された世界とは、これ比喻にすれば、静物画のごとです」

「あれ、ちよつとお待ちください」

「時間性が考慮されていないと云ふことをお考えください。

森羅万象は暗黙のうちに同一性が期待されている。一秒後も一秒前も、林檎はその林檎
であり、あつたのだとされる。人間の脳裏に描かれるすべては静止画像状態になっている。
だが人間は当然ながら時間性を内々には考慮している。それゆゑ感じているのです、實情
に合わない、即さない。さように異逆を感じ、その心奥を微細に聞すれば苦しんでさとい
るのです。また人が時に無常に想いを馳せることも、内的要請の一端と言えましょう。

どんなものも各々の瞬間のそれではない。ただし、ここて言う瞬間とは無限に短く、
面積を持たないと定義される数學上の点に比されるべきものです。

よつて諸現象は一瞬たりとも同一を維持する時間を有することなく、『碗』が『碗』
でいられる猶予はない。同一性の維持はなされない。

實際に碗を、覽なされ。直參なされ。小生の言葉に相違ないとは思われませんか。

而して事實、それが實際に無常だから無常と見られると云うのみではない。それもこれ
も皆、インパルスの内部の架空に過ぎない。仮設に過ぎない。とすれば、一瞬たりとも同
一性を維持しないのは、人間内部に支配權を行使する遺伝子の作爲とも言えますまいか」
「インパルス？」

「脳神経細胞ニューロンの内は外の組織液に比べるとカリウム・イオンの濃度が高く、イオン濃度の
偏向が内と外との電位差を做し、静止電位の状態にあります。

ところがグルタミン酸などがその樹状突起にかけられると伝達経路を開かれ、カリウム
・イオン以外のイオンの流入を受けます。そしてカリウム・イオン濃度が組織液より低く
なると云う電位差の逆転が起ります。これが脱分極であり、発火的なこの現象をインパ
ルスと謂います。

随時これによつて諸考概が諸考概としての具象を做し、意識が生ずのです。大海原や薔
薇や飯の美味しさや風邪熱のたるさや足し算や夢想になるのです」

「いやいや、そうでした。いや、尤も」

「それがこゝなぞ、どうでもよろしい。

「覽めあれ。これな『碗』を手にし、よくよく玩味されよかし。遺伝子作爲説に入る前に暫時、小生が叙説するところを身を以て取得せられよ。百聞一見に若かずとは實にこれぞうら、いかがか。この『碗』と云う奴の自口同一性のなさは。

小孔や貫入によつて做された表面が丘陵地の起伏のようではないでしょうか。いや實際これは一つの丘陵なのです。どうです。事象が事實であることの佳び寂びが眼の奥底を抜き透るようではありませんか。これは殆ど千経の墨の枯淡と思つてよいでしょう。

すなわちいかにもありがたい摩訶般若波羅蜜多心経の写本もまた、實在するは古びた紙本の上の、乾涸びた墨汁でしかない。

いかがですか。

わからない？

そのとおり。

事實は不可得不可説が本来。かようを云、妙義と申す。

おのれが体験を振り返つて、覽なさい。よく閱されよ。

砂糖を舐めれば皆甘いとは言つが各人の感受しているものが同一かどうかは確かめられない、その人の味覚をじかに感受しない限りは。甘い、甘い、とは言つが個人の直截体験以外に眞の伝授はない。また顧みては汝爾が自口の経験を眞の意味にて言説分解し得るかを考慮されよ。いったい、わかりようがありませんや。

体験。その奥深いこと際限なし。事象に直參することの歎ひに窮みなし。

この志野などまこと凡庸な碗です。日常の雑器と比べ、さして違いもない。常識的な鑑賞の見地から申せば味わいなど皆無。飲んで惜しまれることもない。さればこそ言語を絶し、狂烈なる無際限ならずや。實に、實にさようならずや。

指先で表面を愛でてください。ただ汝爾にのみ知られる妙に涵たされてください。

どうです。だが再び撫でもその触感は一度とは繰り返さない。一会のみの邂逅です。いやいや、一刹那の接触に於いてさる感受は到底二つ定義ではないのです。自然の做す微妙、それは古人の筆による茶掛のごとく甚だ深い。小生をして身も裂く焦燥に駆る静謐があります。

「覽めあれ。そこいらにある檜木や楠木と何が変わりましたか。か、庭前の柏樹などと禪の公案のごとく申さは、少々あざと過ぎて候。かような碗など卓袱台の上の飯茶碗のごとし。何をか言つべきことがありませんや。されどまた、いや、さればこそあからさ

まにかくも深玄なる。

平常たるとは高く深い山奥に迷る岩間の清冽がごとしです。

岩魚の一匹が軽らかに身を翻し、さも愉しげに泳ぐ。水底の細石が眩いくらいに楚として空気の物象よりも明晰に、濃く、鮮やかに映じる。魚は跳ね上がり、その尾鰭を燦めさせる。虹を閃かすかのような移ろいを做す。そうそう、鱗の燦爛なるかな。

また一瞬、暗鬱な雲が過ぎつて翳れば、魚影は金粉を漆で固めたような、若しくは螺鈿の底光りのような、滲むかのような燦火を做さずや。

大きな屋敷の昏い広間の奥に端坐する一双の金屏風の光とも異なるでしょう。どちらかと言えば、暗闇に置かれた蒔絵の沈鬱な雅を思つて戴きたい。箏や簫の音が唐突、夢破るかのごとく、土骨間を貫きます。

さあ、そうなれば能楽の鼓の拍たれ、背後の襖絵には峨々たる奇観の岩壁、松が枝を張る姿。(いよお)

瞼の裏に泛ぶは樹幹の表が縄文式火炎土器のよう烈しく波打ちくねる老木です。その朽ち果て折れた巨幹が周囲に神肅なる沈黙の域を做します。赤茶けた磐に長く濃緑の苔、雨頻りで蕭々たり。シダ類の生える霧の軽やかな森蔽、濡れた樺木の木膚と曇天の薄明かりに透ける昭葉との妙。

さあ、さあ、一瞥したまわれ。

雪を寄せぬ峻岳の尾根に巖の褸が做す過嚴なる神性。蒼蒼。熾るように白く輝く雲。無窮なる乾燥地帯、岩だらけの丘の群れ、強く晰らかに暗く見えるくらい烈しく濃い黄鼠、大麦の原種の鬚が揺れ、風化による丘陵の深く複雑な彫りが做す翳、茜を帯びた鮮烈な黄金に染まる羊たちがわずかな草を食む。時が止まったかのようなこの悠久の風景は千代から何ら変わっていないのです。日没終わりて天の河の壮大に囲まれ、大地とはこの大虚空に轟立って飛翔する土塊であることを知る。その凄絶な沈黙が聴こえませんか。

それは木皮を剥いで重ねたような柿板葺の粗い味わいが做すあの感です。

ノートルダム大聖堂を背にシテ島の舳先に立つてseeの水面を眺める少年のいるセピア色の写真。

またはミュートさせたトランペットを口を塞めて強く吹くことによつてひずんだ音と做す技巧を凝らして作った音の触感のリアルさ。

さて、今叙べたような表象一切が同瞬に指先の皮膚に感じられます。だがそれでも、いやそれだからこそ、これが単なる陶の表層の起伏でしかないこともまた慥かなのです。い

かがか、汝爾」

「わかるわけがありません」

よきかな
「善哉。」

仰るとおりです。体験です。一刹那たりとてもこれに触れ、ましてやつかむことなどは夢に於いてすら爲せない。

だが確かに見えてはいる。見えているのに、匂いがするのに、触れられ、聞かされているのに、舌夫の味蕾に沁みているのに、つかめない。心鏡に映しながらも、把握できない。それは捉えた瞬間には既に喪われ、異様（いさま）を做している。だから、つかめない。そう感じる。さようなことがあつてよいものか。しかし日常的現實に、当然のようにありふれている。だからむしろ、捉えられるかどうかと云う以前に、捉えると云うスタイルに自家撞着があるかのようにすら惟える。

無論、捉えられないのは、時間性の爲でもあります。さつきも叙べたとおり、この碗は一秒後にはまつたくの同一物とは言えなくなります。一億分の一秒後でも、一兆分の一秒後でも事情は同じです。一瞬たりとも同一性を維持して止まるなぞと云うことなく遷移し、移り変わりに境目と云うものがありません。それがその者であると云うことが、既にそれ以外の者であることを含んでいるかのことでしてす。

ただし仮にさような時間性と云うものがなかったとしても、汝爾が『不可得』（わからない）と言われたとおりに、事象は同一性を維持しないかのごとく捉えられない。それは先にも、覽しのとおりです。同一性は一瞬に於いてすら維持されることなく、メソポタミアの原風景やら魚の鱗やら能楽やらセピア色したシテ島の古写真やらが同一瞬に燦然と汨濫する。斬腸の移ろう背の色の若く、無限の同時多義性として受け止められている。

あたかも捉えると云う形式自体が喪失の二形式のように感じられ、原的に絡繰りが仕組まれているかの気分がする。

さて、かような様相を眼前にして小生は考え込まざるを得ない」

「別に、わたくしは」

「戯れ言を申される。」

よいですか。これは人類、畢竟の課題の一つです。一大疑惑です。烈しく追究され、熾考されなければなりません。当然です。

もしも同一性を維持しないならば、すなわち変異するのであるならば、通常は時間の流れを伴わなければならないが、それがなくして同一時に異様を做すとはいかなることか。

時間と無関係な変遷異化など思い描けるでしょうか。

できません。だのに時間性に関係なく、同一時間内に変異するかのごとく映る。どう云うことでしょうか。何ゆえにか。さあさあ、お考えあれ、お応えあれよ」

「あ、あの、想像すら及びませんが」

「と。」

一つ考えられるのは、自然が同一の瞬間に於いても同一性を維持しないことが自然の做す戯れであるとする説です。だがしかしお待ちあれ。いったい、小生らが観ているものは、ほんとうに自然そのものなのでしょうか。違います。内奥に在る動機の発頭が累積された世界観です。その『自然』像です。脳髓の、脳神経細胞の働きの効果の内存在としてしかあり得ない構築物です。

だがそうだとすれば、これは奇異なことです。要請による製作物でありながら、自己都合の創作物でありながら、自らの配慮を欺くかのごとく収まらない。自ら志向に異逆を倣し、かつちり嵌まったと云う感じを起させない。それゆえ焦燥させられる。激烈に求めさせられる。もつと精緻を、もつと明晰を、もつとリアルを、もつと一般客観他者性を、と際限なく求め続けざるを得ない。

どこか作爲的ではないでしょうか。策略的陰謀的ではないでしょうか。人間に仕掛けられた罠であるかのようにではないでしょうか。もしどうしても合致しないことが實情ならば、最初から合致しないことが自然として観せられ、収まるよう心が構築されておればよかったのではないでせうか。なぜそうではないか。なぜ小生らは同一性を維持する本質が做されずしてはものごとを捉えられないかのように思い込まされているか。

またこの疑問は何ゆえに起こるか。要請による創作物であれば自己の都合に合致せねばならぬと云う断定は、何ゆえ正論と思われがちか。公然の前提として条件もなく是認されてはいまいか。軌道のようなではないか。またなぜ無条件是認はいけないか。問うは切りがない。顧みれば独り立ちする考概は一つとしてなく、理叡を授けられしこの魂魄には異叛の群れでしかない」

原註 理叡とは現象を本質（イデア）のあるものとして解釈せしめる理性的な力。

以て現象を睿らかとし、了解させる力。由来は不詳だ。一つの FORCE である。

編註 なぜかこの段に及んで唐突に理叡に関する註釈が入る。特に意図はないら

しい。かつて彼に訊いたが、「何アに、ここまで書いていて弗と氣になつたから挿し込んだまです」
と云ふことのようだ。

「ははっ、つまりは脱目への志向のせいだと仰りたい」

「っ、ops! だっ、黙らっしゃれ。戯論^{けろん}を吐く莫れ。まだ早い。

よいか、すべてがかくも異逆剋逆に見えるはなぜか」

「いや、ですから、今も、わたくしは申しましたが」

「そうです。人間は一方で理籟を与えられ、また一方では異叛する群れに投げ出されている。それあたかも敢えて異逆剋逆を受難すべく仕組まれていたかのよう。

では、それはなぜなのか」

「いやその、もうわかりました」

「いいえ、汝爾にはわかつておりませぬ。

よいか。すなわち収まりが附かないのではなく、収まりが附かぬよう、さように造られていたとすれば、どうでしょうか。ならば一切が収まり附かぬことは当然です。そしてまた収まりが附かぬと云ふことは、収まりが附かぬと感じていることであり、裏を返せば収まりを附けたいと情欲していることであり、しかしそれでありながら遂げられないようにあらかじめ構造的に構築されているのだとしたら、人は限りなくより迫真的な新しい眞實を追い求め、妄執する」

「ですから、それがお説の『脱目への志向』で」

「いや、そうは逝かん。逝くものかは。さあ、お考えあれ。

収まり附かぬよう構造されたればこそ、かくも一切が捉えがたく表象し、万象同一性がなきかのごとくに観映し、これによりて無限の諸考概が氾濫するかの見掛が生じてあたかも一つの対象が同一瞬内に数多の異他であるかに自開示し、人は皆、この燦爛たる氾濫に駢られる焦燥を覚ゆる。

『自然』像が常に、同一性なく無際限な精細巧緻の具体を顕わすかのように映ずるのは、これが爲です。自然は捉えがたく感じられる。

また焦燥によつて諸考概が形骸と感じられ、具体實際を捉え切れない不出来な膠着物、一切論説は妥当ならぬと観取され、あたかも異叛の群れにあつて異逆剋逆を受くがごとくに感じられる。

さあ、どうです。もつともらしゅう思いませんか？」

「はい、もう、さようです。いえいえ、お見送れいたしました。参りました。ではともかく先にも申し述べましたとおり、わたくしは本日を持ちまして」

「終わりではありません。お坐りなさい。」

思つてもみなされ。

實物に比して把握がリアリティを倣さない、と云う見掛が倣され、欲求が終わらない。むしろ駆られ、拍車がかかる。より過剰に欣求して飽くことがない。魅せられたるとは、このような情態を謂うのではないでしょうか。

範疇表に収まる諸考概を以て観取されながら、同時多義ゆえに収まらない。把握可能の外たるに見え、思いも及ばぬ精細巧緻が無尽蔵たるように垣間見られ、これに焦かれ、炙られずにいられない。

強い鮮烈を、烈しい明晰を、リアリティを、客観他者性をば求欲せずにはいられない。リアリティが持つ眞烈の光芒の魅惑に囚われるのは、これなればではないでしょうか。精細巧緻を求欲するとは、これなればではないでしょうか。

しかもこのことは原初以来、内奥に在する動機が外へ向かつて顕在しようとし、さらにはより拡大しようと欲する超越への嗜好性、例外・新奇への志向、脱自態への志向と合致する」

「ですから、もう、それは」

「リアリティ感覚が人間を強く惹いて止まないのは、そう云つた理由があるからだとすれば、小生らがリアリティ感覚を得ようとするには、客観的な、他者性に於いてしか得られないように感受させられるのも当然ではないでしょうか。

充溢した、生の瞬発的炸裂である迫眞性を欲するとすれば、理叡や了解の外にしかないかのように感じられるのは、その爲ではないでしょうか」

「はい、はい。まったく以て同感でございます。誠にそつであります。理叡や了解やらの外、いやいや、そこが妙義でございます。」

で、そこなんですが、先にも奏上いたしましたとおり、わたくしは「いかにも」

かくして人は無際限に外向を欲する。より自分以外を、ないものを欲して進化する。いつたい、どこまで逝くのでしょうか。涯しなく何處まででもです。終わることは、許されていない。理由はわからない。自己超越の繰り返ししかない。偶然でしょうか、宇宙の膨張もまた当初科學者の出した予測に反し、今も加速し続けているのです。

ありとあらゆる矛盾を止揚し、弁証的に高次に翔け上がる。それ以外がないからそれが何であるかを考えることは不可能、すなわち止揚は止揚であつて何者でもない。ただ現實に存在する唯一の力學原理です。

どうしてやめられましょうか。やめることなどできやしない。と言つて、他の状態であることがあり得ない。

より脱目的たらんと志向し、エクスタシスの幸福を求欲する、その意義一切は皆空であつて、あらゆる論議の以前です。文字どおり諸考概の一切がその後、にそれによつて造られたからです。

脱目への志向を問い糾することはできない。それがすべてであり、部分ではないから是非や可否にならない。

人間存在は違逆を作る装置です。意識は異叛しか爲せない。例外しか斬新じゃない。非情しか切實じゃない。他者性しか迫真しない。客観性しかリアルじゃない。一般性しか現實じゃない。それが目「超越」し、脱目だから。真と云ふ文字が逆さ吊りされた斬首の象形であることを知れ。非業の死。無惨な屍骸。

「たゞ信じて難くとも、見たものはまことに見たのだ」

幸福とは絶対であつて、疑つても意味がありません。實存する眞理です。論理など云う脆弱なものではない。現實として實在している。是非を問ふことは、虚論に過ぎない。事實として既にある。事實は動かし難く、いかようにもしがたい。さて汝爾、これをいかに感じられるか。

更に言わば、小生には、このような論外の論を認識すること自体既に快い。脱目的な歓びに貰われる。エクスタシス

理釁や了解の外であるかの錯覚を覚えさせるからでしょう。即ち哲學的論議自体も、脱目的志向性によつて衝き動かされた行爲の一つではない。

さよふなまでに人間の欣求するところは脱目的志向に決せられている。人間と云ふ行爲の隅々までもが脱目的志向によつて構築されている。それが生み出すリアリティと云ふ歓樂によつて支配されている。

人には非情なるリアリティ、諸々の考概に染められない無記の事實が清々快と感ぜられる。

人爲から乖離した無情性が余りに多くの地域で神聖と崇め奉られている所以もこれにありませう。

古来本邦に於いても、神かみなからの道みちは清々を重んじ、元来は人爲じんみの做せる社殿などなく、現在にもまだ、鳥居とりゐの尖とがりには那智の御瀧みづがあるばかりの飛瀧神社ひらき、或いは三輪山の山裾に鳥居が設けられるのみにて天照皇大神をお祀り申し上げる檜原神社ひばらなどがあります。が、實にこれなども人の眞が致すところでありませう。

人爲虚し。いや、然し、さうでせうか？　そもそも小生は謂ふ處の理叡や了解も、飛瀧や檜原の御社のやう、無情なる即爾自然ではないでせうか。

慮られよ。意識・理叡・了解、そして感覺、これらは何でせうか？　それらはまず事象を做します。価値分別を做します。考概を做します。小生は、これら全体を、畢竟、考概であると考えます。

根拠はありません。ただ、さういふ風に措定する、つて丈です。

で、その考概ですが・・・

いったい、小生は、諸考概が斯くなるすがたかたちに定められたる由を知らず。諸考概とは理叡いしすゐを礎いしとしたる論理を以て做されたるも小生は解する處曷なんぞやを解さずば了解れうげただ唐突たうとつ。そもそも諸考概いづくにか理叡性あるか。殺伐たる物象とあらざるや。諸考概の本質たりて諸考概を支ふる原理たらん理叡、まさに理叡として観取され、實任し、了解を以て晰しらめ、理叡性を帯びたるが、さてもよく顧みすれば、其にあるは『理叡』に若かず、その尖、漠としてわからぬまま。理叡性著しく乏し。『りえい』に若かず。理叡を做すとは雖いへども而も問ふに応あうなし。理叡性あるものは。ふ。抑々理叡の理叡たる本質眞髓精神、維これ理叡性とやらを鑑みるに、之れ如何、異妙異物異端奇怪也。渺茫として空莫。蛇蠍へくさく牡蠣かき螺ら螺らや魑魅魍魎ちみちやうらに候。小生は日常、惟れを以て理叡性たる考概、すなはち理叡明晰判明了解こを爲す。是不可思議に非ざるや。根拠性原因性原理性莫し。由来経緯なきが若し。あたかも唐突忽焉に見えざるや。

これはもつ無知と言ふよりか、非知と言ふべきでせう。理叡が知といふものの眞髓を做せると措くならば、これ無明にあるとするは既に知る知らぬの問題にてはありませぬ。非知ち（知に非ず）と曰まをすべきでせう。

しかしながら、かやうな結論へ是非もなく導くは、畢竟、脱目への志向なのです。非知なりと云ふ、納得へと、かくも導くは、これ眞實にあるや否やにあらずして、只管脱目快樂ありやなしやに負つて候。

何よりかまはずは結論ありき。よつてこれに至るまでの経緯や根拠、理由や必然性一切が脱目を做す爲に仕組まれた絡繰りの爲の空架、形骸に若かず。いかにしてそのかたちを抉

んだかと求問すとても、得られやうなし。

かやうに理叡及び了解とも既に理叡・了解に非ざりてはや自然の風物に均し。諸々考概も又非知なる物的現象に同じ。是非もなし。

かやうに認識することの清爽快慶なること、及ぶものなし。脱目的快樂にしあれば。

小生らの知性一般をインパルスの伝はりといふ、物的現象として捉へるが快感にしあるは、既成の感覺に異叛すればこそ。物的現象を小生らの魂、感覺、知性、理叡と異逆するものと措くゆゑさう効果あり。脱目への志向の御伎みわざ。

かつて小生が畢生の哲學大著に於いて斯く記せるもその快樂あれば。此處に精髓を抜粹し、試みに読み上げて進ませよう。

『ニューロンの軸索にまでインパルスを伝えられその末にあるシナプス小胞を刺激され神経伝達物質アルタミン酸とかを分泌させられ、受側のニューロンの樹状突起にある受容体に向かつて分泌物を発射させられ、受側被膜のナトリウム・イオンの伝達経路を開かれ、細胞外のナトリウム・イオンを入れられ、カリウム・イオン濃度が高かった細胞内のナトリウム・イオン濃度を上げられ、内外の電位差を逆転させられ、静止電位の状態を發炎イシパルスの現象せしめられている。

これを以て畢竟、諸考概とは笑なんぞや、と糾されても答えようがない。ただ、唐突に了解が生じ、納得とぞう心的事態が起つているに過ぎない。精神だの、思考だの、理性だの、観念だのと言つたつて微の繁殖や菌類の繁殖と何ら変わらない。アメーバの分裂に同じ、ウイルスの活動との相違なし』

嗚呼！言語道斷、素晴らしい。歡樂である。大樂金剛不空眞實。素敵に候にて候』

「いや、そうですとも。いやいや、いもつとも」

『愚か者よ。既に逝いにしへの小生が著作ぞ。今叙べたるは。譽れ既に錆ひたり。

惟爾おもえよ。

小生が今、嘯なげきたる傍証はインパルスが、ニューロンよりニューロンへと伝はつてゐるといふ、客觀的な事實觀察に基づくも、もし一切の事象の觀察であるところのこの意識が正確かつ妥当であると實証されねば、かやう諸考概即インパルス説による理叡の即物性及び無効性の証明は、まさしく無効にて候。(而して有効なれば無効なるか)

諸子らは言ふかもしれん、しかし實測の数値データに基づくものは客觀性の極みにて異論の余地に非ずや、と。

慮られよ。

事實の觀察や、實測データ分析や、數學的理論に基づきて實証しやうとしても、その数値やらが載る土俵は意識である事を。即ち意識それ自体証明済に非ずば、それを用ゐて証明するは無効なる証明を爲すを。しかし、意識の妥当性を証せんと欲するならば、如何にせばよいか。

その爲には、意識に先んじて意識を証左せねばならぬ。されども、さやうなことは爲せようものかは。いや、そもそも意識爾焉ならず。意識として表象してゐる諸々の考概の妥当性をも實証せねばならず。例えば意識に映する處の様々の事象、抽象、適切やら本質やら妥当やらいふ諸考概らも實証せねばならず。いや、さらに又、實証といふ手段に實証性のあるやといふ事及び實証といふ諸考概といふ事自体も又『實証』されねばならず。かやうなること、到底不可能事にて候。しかもこの類の問ひ、幾重にも連鎖し、無際限にあらんや。さやうなことも前に、小生ら、問ふといふやり方が無条件に是認されてゐることを批判し、問ひ糾すべきでせう。しかし又同時に問ふべきでせう。無条件の是認がなぜ不適切かを。いや、しばし待て、先に實証性^{せいせいせい}が問はれてゐるに非ずや？ さう、しかし。いやいや。されど、そればかりか、……

かやうな思考は論理の定式に支へられております。しかし、論理の構築せる枠は正しいのでせうか。論理性とは正鵠を得てゐるものでせうか。しかし正鵠といふ評価方法及びその Concept 並びに Concept といふ Concept 自体も又正鵠を得てゐるものでせうか。實はこのような論及も又論理の『正鵠』さの判定の内にあります。という批判すら論理の運びの法則に従ふといふ条件の限定下にあります。と、我々の論理思考からは見え『解釈』ます。この法則、すなはち論理の航路、オペレーティング規則、これを仮に『論考定款』と呼びませう。しかし、この論考定款たるもの、改めよくよく顧みすれば、これが正しく義しいかをいかやう証ませうや。先程の『意識』と同じ矛盾に陥ります。

それは正しいか。だが正しいとは何か。いかやうなるかたちか。その出身は。いずこよりか萌えたる懶惰の蘭か。それは華に過ぎないのではないか。だが華に過ぎぬとは？

我らは論理を証する方便を論理の他に持たず。しかれど未だ証せられざる論理と云を用ゐるは適でせうか。とは云へ、用ゐるを不適と云は論理によりて導かれたる也。不適と云能はずと云も又それ論理の導く處。とは云も亦復同。これ次に詳述す。

『論考定款は既に思考の根源にありて眼目体^{がんもくたい}に若かず、自身自体にあらばこれを批判する事、論考定款に拠りて無効なりけり。批判さるべき対象たる論理に批判する資格異しと云はそれ論考定款に拠り規定さるる處也。それ故論考定款を批判の対象とせしとき、

唯一の方途である論理は論考定款によりて論考定款を批判する資格を失ふ。論考定款が論考定款を批判する資格を剥奪せし。されば誰が其の資格を剥奪する資格あるや否や。論考定款は依拠するに足らずと断言するは是なり否なりや。誰しもえ答へず。

そればかりなるには非ず。この懷疑も又既に論考定款に依拠しをりますれば』

論考枠(かたち・思考の在り方) Logic Scheme を準(よ)定(てい) Formula 免れざるべし、とかやいふも亦復如是。作麼生。非知也。否。さりとても。何かは。とてもかくても候。畢竟、何處にも能はず。しかし又、能はずと断するも又論考定款に準ひて導かれたる帰結にしあれば是ゆゑに之ならず。佳れも又、限りなき。可不可も逝かず、とてもかくて候といふに勻しき。Rationality Contradiction 合理性矛盾。判断停止さへも撰むべきに及ばず。及ばざるゆゑにへ言へるかは。逝くも逝かぬも爲すべきに非ざるや。非ずにさへ非ざるや。知るすべなし。虚宙に身も裂けずかは。

就いては、小生が research card (MS ff. 126-33^v) より一部此處へ転載す。

『すなはち解決不能、了解不可能の事態にて候。是非にも可不可にも帰結す處あり得べからず。理叡及び理叡性を不可解也と批判するも、その批判する論理性、理性が既に魑魅魍魎たる無念哉。是れ何處にか逝くべきや』

それ、畢竟、さやうなる處へ、小生らを導く絡繰りゆゑに、さやう爲すに若かず。異互ふかは。不也。

違はざる見ゆ。實にさやうなる考概にほゞうつ、絡繰りされてゐるがゆゑに、さやう泛ぶに若かず。

多くの現實的な民衆們、意味も根拠もなき慣習的な通俗の俚に信じて思考する輩は小生が説を嗤ふ。

善哉。

さにしあらばヒューマニズム・テイストの反論も復た若く非ずや、

『さりとても人、紛れなく現實に苦しみ、切實を感じて候。佳れを認めぬは、到底不可能事にて候。

空眸脱目論、畢竟戲論也焉。知らずとも支障なし。人悉く活命す。現實は肅嚴たる不動非情の事實として現に實在爲。若と實在爲。

脆弱な理論を超越し、不動也。まぎしく眞實也。抑々一切考概理叡性に於いてさへ空莫也。とてもかくて謂はんとて、感情が現に實にさやう感ずる。

現實は変更しがたく、嚴然と聳える絶壁。他人事の顔をして非情無表情。かるがゆゑに

現實なりとこぞ嘆かるれ。無慈悲にこそしあれば眼を逸らすことかなはざれ。

さやう吾らの切望一瞥すらせず、傍若無人の他者と叛きて非情の暴虐を爲すにかくも強く現實性を感じらるるにあらずや。

事象に還れ。犬蓼を詠ふな。君らが敷衍、繁文縟礼、好事家の戯れ』

いふを待たず、さなり。現實は非情なる他者なり。異感の覺ゆればおぼゆるほどありありリアルなり。それゆゑ、原的直觀のまま屹然として聳え、諸著概を附さんと辛情せる人間どもに埴のやうな無表情を露せり。只管追眞爲、それ唐突也。忽焉と自らを措定する。一切抒情、諸著概を排斥し、爬虫類よりか情なきその表情なく、物的無味乾燥し、埴の面の若く處なる物性、非知にしあれば、人は知る、これ捉へがたく、理叡を絶し、畢竟空也、と。

空性こそ不可捉の極みにしあれ。最たる現實の現實性の眞髓にこそしあれ。

されば又君はいふ、

『呵々大笑。さやうともいふ哉。とてもかくても候。只唯現實爲爾已也。』

右手を伸ばして果実を掴めば右手は伸びて果実を掴む。歩みて水を汲まば歩み寄られし水汲まるる也。

何もナシと想ふも人の自由。想はぬも自由。それはまかりならんといふも自由。一方位のみなる事をも含む全方位性也。それが現實。眞實は只唯只管現實也』

さなり。慥かに今。それが人を駈り立て令ん。人を無際限焦燥へと駈り、即ち永劫脱自之志向の面目躍如たるに爲非ずや。

而れども貞觀正國寺の僧曰く、

『しかるに、拙僧の鑑みるに、その人道的慷慨も又復、意識に唐突勿焉と措定されたる處を叙するに若かず。』

云、自爾焉。廼佳れ経緯もなく傍若無人に唐突、忽焉に自ずと爾なるものを云。理叡と呼ばはれ、理性と做るるも、それらに爲做れざるもの、抑々理叡理性と云が勿焉唐突に非ずや。事象と異互けず。異互ふかは。双説乃ち「おなじ」也』

自ずから現はると云か、與へられ、かやうな『觀す』と云、特異なる場に擱かるる氣勢せる哉。

さやう覺えを強ひられ、さやうな『考概』と云處に擲たれ、棄てられ、現處に存する直截の觀受をば拭ひ難し。斯く叙するさへも、かやうなる判断へ擱はれて、若くも叙する也。更にさやうさへもさやうなる判断へと擱はれてさやうにいふに若かず。其處にあると云

に若かず候。

さやう観ぜらるれば也。

しかれども、抑々小生ら『觀』と云の何焉かを不知。それただ力尽くに小生らを襲ひ、現に實存を振り裂き上げて現はるるものにしてあらば曰くそれ定義しがたく、いかやうな状態と云かを識らずや。

現今如くありとてもそれ何をか叙べたる事なるものかは。糾すと雖も、而も口管に『知リ』て『知リ』、俚爾に蠢く惟ひと至もの、乃ち口管『了解』と云ものに若かずや。非知也。

抑々知ると解るとや云これ鳥や。何をか爲したること爲るや。問ひ求めて審らめらるるものかは。解らずとも生きらるれば、ナンやら不解らざる、ですらない、ですらも（をわかつ、俚爾に活きる爾に候。生きざるを得ずば。死して何となるものかは。

而れど妄執欣求是已まず。人は日々乳と蜜の流るる安住の地を求め、あたかも宙空に足場なぐば足掻きて淺搔ぐごとく哉。アルカディアを求め、焦燥し、充たされず、涸渴し、あくがるる哉。

さりとても、いざ彼の地に到らば心安らぐ事心が赦さず、呵責す。即ち駈られ懷疑し壞し滾り焦がれ、血へド吐きつ砂噛みつ、まろび汚泥に塗れむ。人、无きものを爾焉求め、在り得へかざる新別天地を求問す。迺、脱目への性が令爲や。空を欣求し、拏裂強大超刺増膨精緻濃鮮奢晰燦を欲して身も裂き碎き天翔躍らんや。

路傍の石、岩に生えたる蘚、茅葺庵に生ずる、小き多し流るる深緑の藻、雨に濡れ響す松籟、蟬の括け、蹲踞の水に、黄き朽ち葉、放擲され緑苔茶碗の欠片。

迺、龍峯寺僧、眞嚴弟子、龍鳳が龍吞神社に奉獻せし公案録筆題第十七段、叙無記に曰

眞曰、文趣眞奚焉にしろとも、究竟也

龍曰、卷子皆同じう究竟ならずや

眞曰、佳文究竟の所以 ※

※異本眞神神社眞覺版には「佳文特異究竟の所以也」とある。其解釈同義

とても、さやう観ぜらるる丈の事に若かざるや。迺『小生らに於いては』と云限り也。卿知るや、他者他處に於いては異様爲るも可焉。小生ら、繆言を想起せられよ。参考迄に左へ当該文を再掲す。畢竟、小生に於いてはさやう也、と云丈乃事也。更に又斯く云之れさへも同様亦復景限りにての話にして而も観ぜらるる丈乃事に若かず。繰り言也。

参考（先叙技略）

しかしたその順序叙についての驥從を願ふ第、小生が、これから語らるその神
説一切斷るとなぐも、平生に於いては、ところ限附きのものであると、飽
くまで小生にとっては、おじかであるところ、小生に観せられ、鼻隱く有効限るも
のであり、ただ小生に直観をこそよく観せられて、いまのやうに過ぎない」と云
うことを嚴密に定義して、境せて撃ちしよ。以上

語を結ぶ方なし。そも又結語ならずや。さらば結ぶ方なきもなしならずや。抑々なきや否やも
定難し。然れど然りとて然も、あゝ。解り兼ね候。え答へずなり侍りつ。唇半開く俛止す。云
ふ處廻すなはち『小生』と綴る此活字、惟こゝに此處迄縷々語りきたるも、此の爲体、竟に未遂不収
さても汝、曰莫れいふ『是叙説須きものは。論を弄し、得る處なし。實に廻りくどき御
仁哉』と。

虚し。抑々鳥や、さやういふ者概は、いやと想はるると云ても。又非想非非想處とても。

問へ、曷なんぞやそれと。虚しと想ふも虚しや。虚しとは曷や。曷とは何ぞや。不知。民衆們的爲
す意味根柢なき慣習的妄考と変はらじ。常日頃民衆們を豪味とぞ難す小生とて豪習の側に在らず。
民衆們が通俗の俚に信ずと変はらじ。同じ也。而して何をか爲可し歟。
人、堂々果敢すべし。

同じも違ふも『おなじ』也。『たがふ』とも謂はずかは。眞仮虚實正誤謬不当互和異背非肯
否亦復如是。而して空と云了解さへ爲す勿れ。

只管現實爲爾曰哉分篤。

人、義しきこと以ふを爲すよし。

かゝるがゆゑひらひのやうせいさう

故飛瀧檜原乃様清爽たれ。さすれば今考へらる限り最善、最高、最大、最強、最鋭の脱

自へ、幸甚へ、涅槃爲樂做す異更事无き狂騷乱舞の猛疾へと、静謐され給ふこと必定に候。

又顧みすれば、その片鱗、レプリカ『卯花牆』の土味にてさへ陰翳深く響り候。未曾有

微妙の法悦あり。

碗を賞味し、こと静かに参入す。

愉しからずや」

「はあ。

そうですか。

いや、尤も。

いやいや、ですからね、常々思つていたにはいたんです。

骨董賣の愉しみや、こたわりなんてものは、わたくしにはちよいと高雅すぎる趣味だ

な っ て ね。

いえ、もうよいのです。お話すべきことは全部お話させて貰いました。

色々お世話を戴きましたが、何と申しましょうか、いかんせん昨今の株価の下落、銀行の貸し渋り、田安、不景気、商売も年々縮小いたしました。わたくしがごとき者の道楽なんぞは、いやまったく以て一番に年貢の納めどきと相成りまして。

さようなわけですから、はい、もつともかくもこれにて、悪しからず」

躑口がぴしやりと閉じられた。飛石を逝くあしおと 聲がし、それも消えた。小雀こがらの声。

沈として影も動かぬ茶室の畳の上に置かれた茶碗、茶筌とともに、碗の口縁に架けられた茶杓。

それは白竹の一本樋しらたけ いっぽんひで、茶入れから抹茶をすくう爲の細い竹筥たけべらなのだが、中ほどに竹の節がくるように詔あやかしわれ、それが少し持ち上がった、蟻腰あみこしとぞう見掛で、丁寧うぬしなに漆拭がされている。



碗に茶筌を廻した。

床の香炉から情ない煙が昇っている。香見、花入れが置かれていた。眼を落とす。金欄の裂地きれで作った仕覆しふくには棗が入っていた。濃茶だからだ。一服する。

曾祖父が興した家業をようやく手伝うようになって数ヶ月余りで古陶磁講座を開設するなど、尚早を超えて驕慢きょうまんたとぞうのはわかり切ったことであつた。

しかし畢生の思想を若き血潮に伝えんとの思い止みがたく熾つた過日、ビラ数枚を貼せずにはいらなかった。応募者は一人、五十代半ばの呑気な独り者で、近隣の乾物屋の親戚であつた。

小生数え二十歳とぞう年齢を鑑みるならば、若人とは当然十七、八歳を下限とする年少者を指すが、ないよりましよと自らを叱咤激励し、今日に至るも、終に去られてしまったわけである。講座は一月を待たずして廃れた。

躑口をくぐり外に出、井戸や手水鉢、石灯籠やらを左に見ながら四つ目垣の中門を通り、内路地から外路地に渡る。

延段を過ぎつて無人の腰掛待合を右にし、母屋に向かった。

内玄関から入つて店舗の方に廻り、番台にうづくまるように店を看ていた婆さんに声をかけた。

「もつ今日はなくなつちまったよ。俺が替わるさ、婆ちゃん」

祖母に見上げられた。眼を細めて皺に埋めている。哀しくなった。

「ありや。ええんか。すまんう。ほいじや、そら。やれ、よつこさあ」

黒い床板の上に婆さんが敷いていた海老茶色の坐蒲団に坐った。ガラス戸越しに通りを見遣れば、路を挟んだ向かいの前餅屋にも婆さんが坐っていた。通りは竜吞神社の参道に繋がっている。その逆を行けば旧街道とぶつかり、道は丁字路となっていた。蕭寂雨が降り始める。

寂れた店であつた。骨董屋だから古具いばかりなのは仕方ない。

『恩顧十結城春深堂』とは、鎌倉の持氏卿が室町将軍義教公との合戦に敗れ、嫡子義成ともども切腹に果て、次男二男らが下総の結城氏朝の城に逃れると、持氏恩顧の武士ども呼ばれずとも結集し、永享十一年より嘉吉元年の四月まで籠城したと謂う故事に由来すると云う。

なぜならば我らが祖先もまたこれに参じ、陥城の憂き目に期せず命を助かり、遁れ遁れてこの龍吞の地に落ちたがゆえに、と言うのだが。何か理不尽である。

以前より地方豪族であつたと謂われるは代々村の豪農であつたことがまず確かなのでそんなこともあつうかとも受け流せるが、結城の城の合戦まで言われると得心しかねる。

要はどつとも読本臭いのである。

と言つよりか文化年間に購入したと思われる和綴が我が家に残っており、その出だしがとてもよく似ているのだ。

本は今も店内に飾つてあり、売物ではないが、ガラス棚の中で客の閲覧に供されている。

有像読本の肇あやうしやう輯五冊ちやうしやうで、閲覧用あやうしやうに開かれた頁は総目録おやうしやうだいもくその末尾に『肇輯題目通計おやうしやうだいもく』
一十回 完』とされている。

曾祖父の道樂が嵩し、田畑を蔑ろにしてまでも成した骨董屋がその扁額を古瓦の上に掲げたのは大正十五年のことである。『恩顧十結城春深堂』の名を決めた曾祖父にしても父祖らの言葉を信じたまでに過ぎないのであつうが、わかつていながら謹讐的に附したのかもしれないと思えなくもない。

遊郭に通つていたのか、遊郭から家に通つていたのか判然とせぬような人だつたと謂つし、酔狂で、と云うのもありかとも想つ。小生がかくあるもその血筋か。

因みに曾祖父の父と云う人が念仏屋と呼ばれるくらいに愚直に熱心な御仁であつたのにと囁く人もあつたらしいが、その寺の娘を娶つたことを思えば、さほどではない。

祖父天貞あまじやう郎は老鬚を蓄え、豪胆な人でもある。

今日もまたいわれの知られぬ茶陶に大枚を叩いて帰って来た。午後八時を過ぎており、表戸を閉めた小生が落語のCDの音事を絞りつつ、ガラス棚を眺めていたときのことである。唐突に、

「眞今、これを見る。信樂だ」

珪石や長石を多く噛み、あちこちに石はぜを倣す蕪雜さ、ぷっくり膨らんだ火ぶくれ荒々しい火割れ、灰なだれが焦げ附いてできた深玄な無骨顔のこげ、降り被った松灰が溶けて流れ出し、自然釉となるが、松灰に含まれる鉄分が青緑を倣し、長石と融け合つてガラス状のビードロ釉となっている。白い長石が倣す蟹目の藪にらみ、ふりものの被さる火色は溶岩にも見える。

たゞは諸氏が今紙製本を覽しておられるならば、それを眊めるようや斜めにして光を乱射せしめられよ。微か繊維のいくらかの燦めくが見えるであらう。それが小生の眼のあたりにする陶の膚である。

インク印刷の活字で「正確に言えば活字ではないが、まあ、印刷文字のことだと適宜に読み替えてください」読まれているならば、そうとう活字を倣すインクとして眺ぜられよ。

紙織の上の点綴たるさまや、形が信樂の景色である。

小生が龍安寺参ぜる折の頌句を此處に吟して曰く、

ぐわてゑのぐわてゑのふわらぐわてゑのふわらすわんぐわてゑのばふてゑのすぶわふわ

さて、小生かくも彼の信樂を凝視し続けつも、こちらを眺めている祖父の微笑をも頬の皮膚に感じつつ、かつ怯むことなく、相參ることもなく、止むこともなく口管に眉間に皺を寄せ、力み続ける。

あなや、我が事ながらも少しの進歩すらも見られぬわと思わざるを得ぬ哉。すなわち妄りに執して二喜二憂一向融通なし。それまた善しならどは言わぬつもりも、これまた妙義ならずや。白竹の一本樋、蟻腰の見掛。

いや、さうとても、さてもさでも可笑しきものか、耄碌教養者、小生鹿爪らしき面が堪らんらしき風。いややそれもそれ之又善哉とすべしか。

完
まっ
たし



——人間存在の實存的分析による存在論考——『穴工』——書画彫工目次

出像画工
同 源 とうげん
叭 羅 蜜 斗 ぱらみと

浄書筆工
天 平 あまひら
普 蕭 ふせう

刮 剝 人
鑿 之 いの
べ 裂 いれつ

時旧曆平成廿參年辛卯師走辛丑大寒款冬華吉日全書無闕遺焉

天 之 あまの
哥 舞 妓 かぶき

平 衛 ひらゑ
隆 臥 たかふし

彝 佐 いさ
早 蕨 さはらび

白 舟 しらふね
大 樂 たいらく

炎 ほの
春 慶 しゅんけい

發 行
書 販



【巻末附記資料】

龍峯寺僧 龍鳳 公案録「叙無記」肇輯第十七段

ふみのこころいづく
眞曰、文趣眞奚焉にしあるとも、究竟也

龍曰、卷子皆同じう究竟ならずや

このふみ
眞曰、佳文究竟の所以※

眞巖が言った「この書に何が記されていようと、この書は究竟の書である」

龍鳳が言った「ならば、すべての書が究竟の書ではないですか」

眞巖が言った「それこそがこの書の究竟のゆえんである」

註) 龍峯寺の僧、眞巖が弟子、龍鳳が龍舌神社に奉獻した公案録「叙無記」肇輯第十七段より抜粋。
白善、之を讃じて曰く、「森羅万象を平等に貫通せる無記を露呈す」

※異本眞神神社眞倉蔵版には「佳文特異究竟の所以也」とある。其解釋同義。

本書は文藝春秋社主催の文壇新人賞に二度までも応募され、終に一次の選考をすら通ることもなく、今日に至ったものである。されば紙片やインクの染み跡にしかたざるもの、黄昏時の茜の日射しを浴び、織られ絡ませられたるパルプ繊維の一々を燦めかせ翳りを做す。そのさま鬱憤やる方もなく、顔を擡めたる偏屈の表情を爲し、ユーモラスですらある。